

city&life



都市のしくみと暮らし

no.129

Aug. - Nov. 2020

特集

都市の言説を巡る旅——8のキーワード
から探る都市[論]の現在2020

巻頭言

都市を語り、人を語る

弊誌では2004年に「都市の言説を巡る旅」と題して、都市に言及する多くの議論を紹介、批評する特集を組んだ。2000年代に入り、都市は大変革期を迎え、改めて都市とは何か問う必要があると考えたからである。あれから15年、都市は今またさらなる変貌を遂げようとしている。ただそれは、進歩や成長、あるいは再構築や再編成といった意味とはいくぶん違った様相を呈しているように思える。都市は物理的な構造物としてのみ存在するのではなく、常に／すでに人間が深く介在するという意味で、社会そのものでもある。都市とは、物質的存在と人間集団が織りなすタペストリーであり、アマルガムそのものなのだ。

本特集は、「都市の言説を巡る旅」の2020年版である。テーマに合わせて、8のキーワードを抽出。そのキーワードにふさわしい書籍や論文を数冊、数本選び、8名の研究者に解説をご執筆いただいた。都市を語ること、それはとりもなおさず、都市に生きる人間を語ることであり、という理念に基づいて、2020年版は編まれることになるだろう。畢竟、そこで抽出されるキーワードは、より人間を意識し、社会を射程とするものになるはずだ。

また今回、表紙およびグラビアには、美術作家・勝本みつるによる、本と都市をテーマとしたコラージュとアッサンブラージュを用いた。さらに各項目の冒頭には、写真家・新井卓による写真を連作として配し、8のキーワードに通底する雰囲気表現した。これらはキーワードを直裁に説明するものではないが、そこには、今、都市に漂う違和感とこれからの都市への希望が映り込んでいるように思える。(編集部)



表紙・裏表紙——「untitled」勝本みつる
photo:松浦文生

特集

都市の言説を巡る旅—— 8のキーワードから探る都市「論」の現在2020

contents	01 ガバナンスとマネジメント 都市デザインのふたつのベクトル 飯田泰之	2
	02 レジリエンス 都市の復元力 香坂玲	5
	03 SDGsとZEH 健康都市の新エンジニアリング 村木美貴	8
	04 エリアマネジメント まちをバリューアップする 保井美樹	12
	05 オープンスペース 自然や余白から都市を再編集する 福岡孝則	15
	06 ジェントリフィケーション 都市開発の光と闇 森千香子	20
	07 ICT・AI 超高齢社会・ネットワーク・アーカイブス 桂英史	23
	08 パブリック・ヘルス グローバリズムとパンデミック 美馬達哉	26
	連載 Let's Greening! 緑のまちづくり⑦ 上野と谷根千を結ぶ「みちひろば」	30
	連載 子どもたちの「笑顔」に会いに行く⑩ イーエーエスはんだやま保育園 キラキラ未来! ふくらめ、こどもの想像力!!	32
	連載 噂の「駅前」探検⑦ 池袋駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜	34
	back number・information	38

勝本みつる

かつもと・みつる—1961年滋賀県生まれ。印刷物、古い写真、布や毛皮など、身近な素材から多様なアッサンブラージュやオブジェを制作する美術家。作品集に「study in green緑色の研究」「one day或る日」他がある。

以下、本誌グラビアのタイトル。
「untitled」(表紙・裏表紙)
「水の辺」(p11)
「Un bon livre est…」(p18,19)
「山の辺」(p29)
photo:松浦文生

新井卓

あらい・たかし—1978年神奈川県生まれ。ダゲレオタイプを用い、核の歴史への関心と接続させた作品などを発表。2016年、木村伊兵衛写真賞、日本写真協会賞新人賞、神奈川文化賞未来賞。現在、ヨコハマトリエンナーレ2020にて、千人針をモチーフとした新作を発表、展示中(～10月11日)。

「新しい地図」
都市から都市へ——旅の結節点である街々に〈わたし〉の一部は消えることなく残留している。輻湊する記憶の断片は静止しているのではなく、ニューロンのように息づき発火しながら、やがて互いに連絡をはじめるだろう。人いきれと隘路の臭気、郊外の空の冷たさ、生ぬるい地下鉄の風に編み込まれた記憶の網目は過去と現在をないまぜにした時空へと、ひとりでに触手を伸ばしていく。新しい地図は、まだ、ない。(新井卓)

01 ガバナンスとマネジメント

——都市デザインのふたつのベクトル



飯田泰之

いいだ・やすゆき——1975年東京都生まれ。明治大学政治経済学部専任准教授。東京大学経済学研究科博士課程単位取得満期退学。駒澤大学経済学部准教授を経て、2014年より現職。専門は、マクロ経済学、経済政策。著書に『日本史に学ぶマネーの論理』（PHP研究所／2019）、『経済学講義』（ちくま新書／2017）、編著書に『これからの地域再生』（晶文社／2017）、『地域再生の失敗学』（光文社新書／2016）他。

都市計画や地域振興が次第にまちづくりと呼ばれるようになり、さらにはエリアマネジメント、エリアデザインといった横文字で語られるようになって久しい。しかし、呼び名は変われど、これらの施策が目指すもの——都市の関係者がより幸せに暮らすための場所をつくるという大目標に変わりはないだろう。



魅力的な都市・地域を構築するためのガバナンスとマネジメントの方向性はふたつに分類できる。第一が、都市・地域のマクロ的な特性を整理することを通じ、都市地域全体の方針を定め、その大方針を実現するための個別的政策を模索していく、いわばブレイクダウン型の方針である。

ブレイクダウン型の地域政策立案において、重視されるのが経済・雇用の動向だ。『まちづくり構造改革 地域経済構造をデザインする』、『まちづくり構造改革Ⅱ 新たな展開と実践』はブレイクダウン型の都市・地域マネジメントを考える上で最良の教科書のひとつである。

同書では、「まち」を単位に、そこを「住みたいまち」、「働けるまち」、「訪れたいまち」にすることを目標に、地域経済構造分析をもちいた実践の手法が紹介される。

人々の生活に欠くことができない要素は稼ぐことであり、そのためには働き口が必要だ。まちのサイズは働き口の数で決まる。

働き口の数はそのまちの基幹産業——まちの外に販売する財・サービスをつくっている産業の規模から大きな影響を受ける。たとえば、域外に販売しているのが主に工場製品である地域ならば、工場数や各工場の規模で基幹産業の雇用数が決まり、彼らのニーズに応じてサービス業（商店や飲食店など）の規模が決まる。地域経済分析は地域における基幹産業を特定することからはじまる。

基幹産業の重要性から、かつての地域振興においては典型的な移出部門である工場誘致がひとつの花形施策とされていた。しかし、地域の働き口、ひいては人口を増やす方法は基幹産業の拡大に限定されるものではない。

基幹産業の周辺にある活動——原材料や加工、商品開発を都市・地域内で行うことでまちの働き口を増加することができる。

地域の産業間の関係性を捉えるためのツールとして、内閣官房はウェブ上でRESAS（地域経済分析システム）を提供している。『地域経済循環分析の手法と実践』ではRESASを活用した分析例が豊富に紹介されている。



基幹産業をいかにして育てるか、その周辺の経済活動をいかにして地域内で内生化するかを構想することを通じ、エリアのマネジメント、デザインを考えるとという技法は今もなおエリア全体の目指す方向、マネジメントのコンセプトを明確にするうえで有用性の高い思考法である。

一方で、基幹産業の原材料を供給する新ビジネス、地域外へのPR活動や新製品開発は行政のかけ声や補助金から生まれるものではない。これらの活動は「人」によって行われる。『クリエイティブ都市論』が強調するクリエイティブ経済の担い手にとって、その都市・地域が「住みたいまち」、「訪れたいまち」となるのには何が必要なのだろう。

コロナ禍以前までの傾向ではあるが、全国的に高い有効求人倍率のなかでは単に「働けるまち」であるだけでは人を引きつけることができない。仕事の量だけではなく、その都市が自己実現の機会に開かれているかといった働き方の質の重要性は近年さらに高まりつつある。

ここで注目されるのが、都市のマネジメントにおけるミクロの視点である。一企業や一団体でも可能な小さな施策を重ね合わせることで、魅力的な



『まちづくり構造改革 地域経済構造をデザインする』
中村良平／日本加除出版／2014



『まちづくり構造改革Ⅱ 新たな展開と実践』
中村良平／日本加除出版／2019



『地域経済循環分析の手法と実践 生産・分配・支出の三面から導く、新しい地域経済政策』日本政策投資銀行グループ 株式会社価値総合研究所／ダイヤモンド社／2019



『都市をたたむ 人口減少時代をデザインする都市計画』
饗庭伸／花伝社／2015*

*は本文中に言及がないもの

都市というマクロの改善を目指すのが
エリアマネジメントの第二の方向——
ボトムアップ型のマネジメントだ。

『小さな空間から都市をプランニ
グする』は土地・施設利用の観点から、
このボトムアップ型のアプローチを提
言している。全国の多様な実践例を紹介
することを通じて、そこに通底する
これからの都市プランニングの要点を
導いているという点で、本書そのもの
がボトムアップ型に編まれている。

職場へのアクセスのよい新興住宅
地、利便性の高い駅前ロータリー、公
共施設の集積といったかつての正解、
これまでの都市計画の中心だったマス
タープラン型都市計画の実効性は低下
している地域が少なくない。魅力を感じ
る都市と効率的な都市はイコールで
はないのだ。

人々が都市に望むもの、人を引きつ
ける要因が多様化するにつれて同書が
重視する「より身近な空間の改善を確
実に実行し日常生活の質的な向上」を
目指すことの重要性が高まっている。
その一方で、このような個別的な試み
の集積が都市全体の魅力を向上させる
ためには、それぞれのプロジェクトが
相互に補完的で調和的である必要があ
る。

ボトムアップ型のプランニングに
は、反語的であるが、それを束ねるヴ

イジョンの共有——マスターコンセプ
トが必要だ。無理のない、緩やかなマ
スターコンセプトが都市のなかで共有
された上で個々の「小さな空間」が積
み重ねられていく。そのなかで都市が
変わっていく(変えていく)という思考
法は刺激的である。

同書では各地での事例を、行政、民
間企業・団体、市民といった主体別に
紹介している。これらの小さな空間の
価値を高めることを都市全体の魅力へ
とつなげていくためにはどのような方
法論が必要なのだろう。小さな空間の
連帯、小さな時間の積み重ね、小さな
共感といったキーワード、さらにはそ
の連帯・積み重ね・共感を生み出す方法
論を実践例と照らし合わせながら読む
ことで得られるものは多いだろう。

また、これらの営為は恒常的な設備・
建築のみによって行われるわけではな
い。『あたらしい路上のつくり方』で
は、屋外公共空間を利用したイベント
を中心に、ソフト面から人を引きつけ
る方法を紹介している。魅力あるまち
はハードとソフトの両面から形成され
るのだ。



マクロの経済分析から導かれる都市
経済の方向性、小さな空間の積み重ね
から生まれる数値化されない都市の魅
力——専門性の違いもあって、時に対

立的な方法論と捉えられがちな両者の
どちらを欠いても都市・地域の再生は
おぼつかない。両者を調和させる、両
利きのガバナンスとマネジメントが今
求められている。

02 レジリエンス ——都市の復元力



01 ガバナンスと マネジメント



『クリエイティブ都市論
創造性は居心地のよい場所を
求める』リチャード・フロリダ
／井口典夫訳
／ダイヤモンド社／2009



『年収は「住むところ」で決まる
雇用とイノベーションの都市経済学』
エンリコ・モレッティ／池村千秋訳
／安田洋祐解説／プレジデント社／
2014*



『小さな空間から都市を
プランニングする』
武田重昭他編著／
学芸出版社／2019



『あたらしい路上のつくり方
実践者に聞く屋外公共空間の
活用ノウハウ』
影山裕樹編／
DU Books／2018

香坂玲

こうさか・りょう——1975年静岡県生まれ。名古屋大学大学
院環境学研究科教授。専門は、国際自然資源管理論・環境
政策学。フライブルグ大学（ドイツ）環境森林学部森林経済
学研究所博士課程修了（理学博士）。国際環境計画 生物多
様性条約勤務、金沢大学准教授、東北大学大学院教授を経
て、2019年より現職。著書に『地域再生 逆境から生まれる
新たな試み』（岩波ブックレット／2012）、『森林カメラ 美
しい森といのちの物語』（清水弘文堂書房／2011）他。

2020年1月に実施された入試センター試験の国語の科目では、漢文の選択肢が従来の文字の選択肢ではなく、家屋や自然の配置の図の選択肢を使ったことが大きな話題となった。新制度の「共通テスト」での総合的な学力を考える象徴的な動きの予兆として、やや驚きをもって報道された。その漢文と同じ国語の現代文の読解問題では、河野哲也氏による『境界の現象学』からレジリエンスについての概念の説明文が掲載されている。具体的には、揺れる船のなかで物を運ぶといった喩えを使いながら、「攪乱を吸収し、基本的な機能と構造を保持し続けるシステムの能力」を意味することを説明している。レジリエンスは、もともとは物質が元の状態に戻る「弾性」のことを意味する。60年代になると生態学や自然保護運動の文脈で、生態系が変化に対して自己を維持する過程という意味で用いられるようになった。とくに生態学や個人単位では心理学の専門用語であったものが、都市や地域社会という文脈においても国内では注目されるようになった。

国内では東日本大震災を契機に、レジリエンスという概念を弾力性、しなやかさ、復元力、あるいは災害に立ち向かうのではなく「いなす力」といった観点から捉え直すことで、都市その

ものを根本から見直そうという動きもある。読む側が時間的制約のある国語の入試という形であれ、受験者数50万人弱と、多くの受験生がこの用語に触れたことの社会的意義は大きい。日本国内、東アジアでの都市、地域コミュニティの特性を踏まえた議論の深化が期待される。

たとえば、奈良・稲村の『レジリエンスの諸相』では人類史の視点から、対象を災害、地球環境、心などと広範囲に扱い、また人類史という時間軸から、霊長類・類人猿、古代文明、ヒトと病原菌との共存といった観点から議論を展開している。また最終章(p308)では、危機や逆境という客体と、個人、家族、コミュニティから国家、地球の対応に関する図表が掲載されていて、各学術領域の用語の整理、学際研究や社会との架橋の際に有効となろう。

海外の議論では、ハリケーン・カトリナを題材として住民の「この土地を離れない!」という思いと個人の視点を中心としてまとめている『災害とレジリエンス』がある。大金持ちの資本家だけがあるコミュニティに集っていても、なかなか推し量ることは難しいが地域の人々から生じるリーダーシップ、地域への思いがなければ、そのコミュニティはいくら資本があっても、翌日には誰もいなくなってしまう

う可能性がある(たとえば高級別荘地など)。同時に、より広範囲に生態系、心、経済危機を論じた『レジリエンス 復活力』でも概念整理がなされている。二つとも原著が2012年というのも一つのエポックを象徴している。

さて、話を国内に戻すとセンター試験と同じく本年1月に出版された日本建築学会の出版する『建築雑誌』(2020年1月号)では、「特集 レジリエント建築社会の到来」が組まれ、私も「座談会 実践的なレジリエント建築社会の実現に向けて」のなかで議論をした。やはり歴史、まちづくりや計画、構造といったさまざまな分野を学際的に扱う建築学という分野のなかで、レジリエンス概念が展開される萌芽が議論されている。

実践面では、災害への対応において地域社会に存在した人員の余力、小規模な事業者にまったく余裕がない状況では、「いざという時の糊しろ」として機能していた人材面での冗長性などが失われていることなどが指摘されたことが印象的であった。また、山林という川の上流と都市という下流をつなげる契機として、2019年に制度が始まっている、森林環境譲与税と森林経営管理制度の可能性にも私が言及している。

『日本森林学会誌』102巻2号に掲載

されている秩父市と豊島区の連携など、広域的な連携の萌芽と、国土レベルでのレジリエンスについての展開に注目したい。

その座談会への呼びかけには、編著者として2012年に上梓した『地域のレジリエンス 大災害の記憶に学ぶ』を編集委員の増田幸宏教授(芝浦工業大学)に見つけていただけたことが契機となった。12年当初は、まだまだ概念が定着しておらず、タイトルも「レジリアンス」か「レジリエンス」という表記かで随分、議論したほどだ。総合地球環境学研究所の研究者による概念整理、災害ボランティアのエキスパート、風評被害の研究者という研究面での分析が前半でなされている。同時に後半では実践にかかわる記録として、東海地域を地盤とする、地場の建設業者やインフラを支える東邦ガス株式会社の社員による東北における復旧活動についても報告している。各研究者の視点、実践の観点から、東日本大震災という大災害(および活かされなかった部分を含めた阪神淡路大震災の教訓)を中心に、レジリエンスという概念を具現化した著書となっている。

ポスト・コロナを見据えた議論は、感染自体も進行形であり、まだまだ途上である。ただし、欧州などではロックダウンという状況下で富裕層のみが

持つ庭へのアクセスの格差、都市近隣の公的な緑地の役割などの議論が始まっている。2020年5月には、南山大学社会倫理研究所設立40周年シリーズ懇話会がオンラインで開催され、金沢大学の市原あかね氏が学際研究・教育のためのレジリエンス思考の展開を、また京都大学農学研究科梅津千恵子氏がアフリカ大陸における気候変動の適応策としての作物選択や政策のあり方について展開をした。南山大学社会倫理研究所からはセミナーの報告が公開予定となっており、公開後に一読いただきたい。

以上、あくまで私個人の体験に近い視点ながら、レジリエンスという概念にかかわるエピソードと本のお話を紹介した。最後になるが、今年は新制度に移行する前の最後の「大学入試センター試験」となった。「共通一次世代」など、大学ごとの入試の前の共通テストは、世代や時代の区分を象徴するものである。2020年1月から、本稿を執筆している6月の半年間で、新型コロナウイルスの感染拡大によって世界も日本社会も大きく変わってしまった。最後のセンター試験でレジリエンスという概念が登場し、建築雑誌においても特集号が組まれたことは、偶然ではなかろう。地震・台風などの自然災害が頻発し、ハードな物質的な建設だけ

ではなく、地域コミュニティの結びつき、社会の復元力が必要ということは災害後に繰り返しレジリエンスという概念と合わせて指摘されてきたところであり、今後はウイルスとの共生と日常の再構築という側面からも注目されそうだ。

02 レジリエンス



『境界の現象学』
河野哲也／筑摩選書
／2014



『レジリエンスの諸相
人類史的視点からの挑戦』
奈良由美子、稲村哲也／
放送大学教育振興会／2018



『災害とレジリエンス
ニューオリンズの人々はハリケーン・
カトリナの衝撃をどう乗り越えたのか』
T・ウッテン／保科京子訳／
明石書店／2014(原著2012)



『レジリエンス 復活力
あらゆるシステムの破綻と
回復を分けるものは何か』
A・ゾッリ、A・M・ヒーリー／須川綾子訳
／ダイヤモンド社／2013(原著2012)



「特集 レジリエント建築社会の到来
座談会・実践的なレジリエント建築社会の実現に向けて」
竹脇出、香坂玲、林春男、増田幸宏、
高口洋人、難波和彦、中川浩明／
『建築雑誌』2020年1月号収録



「森林環境譲与税を介した都市 農山村連携
―埼玉県秩父市と東京都豊島区の事例から」
『日本森林学会誌』102巻2号／
p.127-132



『地域のレジリエンス
大災害の記憶に学ぶ』
香坂玲編著／
清水弘文堂書房／2014

03 SDGsとZEH

——健康都市の新エンジニアリング



村木美貴

むらき みき——千葉大学大学院工学研究院教授。横浜国立大学大学院研究科博士課程修了。東京工業大学助手、オレゴン州ポートランド州立大学客員研究員を経て、2002年千葉大学工学部都市環境システム学科助教授、2008年同大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻准教授、2013年より現職。工学博士。専門は都市計画。主な著書に『最新エリアマネジメント 街を運営する民間組織と活動財源』（共著／学芸出版社／2015）、『都市田園計画の展望』（共訳、トマス・ジーバーツ著／学芸出版社／2008）、『英国都市計画とマスタープラン』（共著／学芸出版社／1998）など。

少し前にはサステナビリティといえば、二酸化炭素排出量の削減を多くの人はイメージするに留まっていたが、2015年にSDGs持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals）が国連で採択されてからは、その意味が広く認識されるようになった。SDGsは、17の目標と169のゴール、232の指標で構成されている。その内容は貧困に始まり、飢餓、ジェンダー、生態系・森林、水資源など多岐にわたり、サステナビリティの意味がとても広いことを認識させる。そして、それが社会にいかに関係し、どう役立つのか、企業の行動にどのように影響を与えるのか、こうした基本的なSDGsのもつ意味や取り組みについては多くの解説が存在している。

まず、最初に、簡単にSDGsが何を目的とし、これを行うことで社会にどのような影響が出るのか、企業との関係、そして表裏一体のように出てくるESG投資（環境=Environment、社会=Social、ガバナンス=Governance要素を考慮した投資）といかに関係するのか、企業の取り組みや各目標への対応など事例をもとに説明する『SDGs入門』、『60分でわかる！ SDGs超入門』などが簡単に読めてわかりやすい。もう少し詳しいものとして、『SDGsの基礎』では、SDGsを巡り、国の取

り組み、企業の役割や戦略、いかにSDGsを進めるか、取り組み方法などについて解説をしている。これらは基本的にはSDGsがどのような役割を担い、何を目指しているかを解説しているが、反対に企業の目線で、ESG投資の側からSDGsを見る本も多く出版されている。それは、投資家がサステナブルな企業への投資に着目しているからである。本稿では、SDGsを主体とした紹介を行っているものの、たとえば『投資家と企業のためのESG読本』などは、投資家がどのような点に着目し投資を行うか、そしてESGに関連するトピック40について解説がなされている。そこには、脱炭素、再生可能エネルギー、グリーンボンド、気候変動、環境不動産などの環境系のキーワードや食料、人権などのSDGsと深いかかわりのある項目もあり、社会を変える投資とは何かという観点からSDGsを見ることも大事だとわかる。個別企業の取り組みやその必要性は上述した本でわかるものの、これが、都市、建物への展開という観点で説明されているものは限られる。その意味では、『SDGsの実践 自治体・地域活性化編』はわかりやすい。現在のトレンドが、環境モデル都市、環境未来都市からのつながりで説明されている。そして何よりも全世界で活用できる

SDGsの考え方は、日本の都市づくりではそのまま活用しづらいものが存在する。たとえば「国際的な貧困ラインを下回る人口割合」などのゴールである。本書には、ローカル指標として、日本で使える指標事例が明記され、日本の都市づくりで何を求めるかが明確に記載されている。また何を参考にすればいいかという「実践」のための参考資料と、SDGs未来都市に選定されている都市で実際に何が行われているかが説明されており、理解が進む。

とはいえ、こうした専門性が高い本は難しいという場合には、『持続可能な地域のつくり方 未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』は、どのようにSDGsを用いて地域で展開すればいいのか、それを身近な内容にゴールを読み替え、個別指標間の関係を考え、関連付ける、そしてそのやり方を丁寧に説明するという点でとても参考になる。筆者自身、SDGsのゴールを見ると日本では関係しないと思われるものが列挙されているため、遠いと感じることも多いが、この本を見ると、身近な内容に読み替え、なおかつ、それが世界各国との比較などで、いかに日本に課題があり、その解決が求められるのかが解説されている点で参考になる。

また、この本に類似しているが、自治体でいかにSDGsを実践すればいい



『SDGs入門』
村上芽・渡辺珠子／
日本経済新聞出版／2019



『60分でわかる！
SDGs超入門』
バウンド／技術評論社／
2019



『SDGsの基礎』
事業構想大学院大学出版部
／宣伝会議／2018



『投資家と企業のための
ESG読本』
足立英一郎・村上芽・
橋爪麻紀子／日経BP社／
2016



『SDGsの実践
自治体・地域活性化編』
事業構想大学院大学出版部
／宣伝会議／2019

のか、ワークショップのやり方をどのように進めればいいのか、課題の見つけ方、戦略の立案方法がステップごとに説明されている『SDGs×自治体 実践ガイドブック 現場で活かせる知識と手法』は、実践方法を学ぶうえで参考になる。最近の政策立案では見られるようになってきたが、バックキャストिंगのアプローチで目標を設定する方法も説明されている。目標を設定し、その達成について検討していくことは当然のことであるが、SDGsにおいても2030年という目標年次が設定されていることから、それに向けたタイムラインで何を行っていくか考える必要性がある。SDGsに限らなくても、幅広い目標に対して、どのような方法で考え、事業実施を検討していくか柔軟に考えるヒントになるであろう。筆者も街・地域でのSDGsを視覚的に説明するためにマップづくりをしているが、本書でも同様のマップが北海道下川町で作成されている。ゴールやターゲットの設定方法を超えて、実際、町のどこで、何が行われているのか空間に落としてみるのも、SDGsの実践という観点ではとても大事な要素といえる。

これまで述べてきたように、SDGsによって地域をつくる際に、もう一つ大事な要素が環境への負荷低減という要素である。世界ではパリ協定を受け

て、また新型コロナウイルスの蔓延を受けて、環境への対策に大きく目が向けられている。ただし、日本の場合は、それに追加して災害への対応を同時に検討していく必要があるし、人々の関心が見えないCO₂排出量以上に、災害への対応にある。特に、東日本大震災や北海道胆振東部地震を経て、電力の重要性を私たちはとても高く認識するようになった。近年、新築される住宅のかかなりの割合がZEH(ゼッチ=Net Zero Energy Houseの略称)である。これは、断熱性能を大幅に向上させ、なおかつ、高効率な設備システムを入れることによって生活環境を維持して、省エネを大きく図り、なおかつ再生可能エネルギーの導入でエネルギーの利用のネットゼロを実現するものである。そもそもZEHが何か、どのような設備が必要になるのか、何を検討しなければならないのか、こうしたZEHについての説明をわかりやすくしているのが、『健康・快適なZEHのつくり方 工務店と設計者の新常識』である。この本では、ZEHとして建てられた建物の間取り、消費エネルギー量、エネルギー削減率など、一般的にわかりやすい指標で説明するところから始まっている。新しい技術や環境用語を知らずとも、どのような建物が建てられるのか、それがどれほど暮ら

しに役立つのかが写真や図と共に説明されているので、理解しやすい。それもコンパクトな都市型住宅から、郊外住宅、寒冷積雪地など八つのケースが紹介されており、これからZEHを考える人にとってはイメージがしやすい。こうした事例をみた後で、ZEHのつくり方として、断熱、設備、再生可能エネルギーとZEHに必要な事項が詳しく説明されている。

最後に紹介するのは、『ゼロ・エネルギーハウス 新しい環境住宅のデザイン』である。この本は、通常、大学の研究室で行っている実験を実際の建物として建設した早稲田大学の提案したZEHの記録である。ただ、実験を記録しているのではなく、世界の環境住宅についての説明、ZEHに向けて何をしていかなければならないのか、そして実際にZEHを建設することの苦労、そこでの実際のデータがどうだったのかを含めて記録されている。そもそもZEHとは何かを説明する解説本ではなく、それがどのようなものであるのかをデータと共に説明、解説しており、建築環境、建築設備の実際が手にとるようにわかること、そしてそのチャレンジの精神に触れることのできる一冊である。

03 SDGsとZEH



『持続可能な地域のつくり方
未来を育む「人と経済の生態系」
のデザイン』
寛裕介／英治出版／2019



『SDGs×自治体
実践ガイドブック
現場で活かせる知識と手法』
高木超／学芸出版社／2020



『健康・快適なZEHのつくり方
工務店と設計者の新常識』
一般社団法人ZEH推進協議会編
／学芸出版社／2019



『ゼロ・エネルギーハウス
新しい環境住宅のデザイン』
田辺新一他／萌文社／2017



04 エリアマネジメント

——まちをバリューアップする



エリアマネジメントは、1970年代の米国で、都市郊外の発展と共に中心部の陳腐化が進んだことを背景に始まった。筆者が初めてアメリカを訪問したのはすでに1980年代に入っていたが、そのときもニューヨークは財政難。公共サービスのレベルが低下し、治安は悪化していた。そんな中、各エリアで地権者や事業者が立ち上がり、街に人や資本が戻るよう自ら資金を出してまちづくりの組織をつくり、まずは街を「Clean and Safe」にする活動から始めた。それがBusiness Improvement District: BIDという制度を活用した都市のマネジメントである。今日では、大小問わず全米の諸都市にこのBIDが導入されている。

この仕組みは2000年頃からたびたび日本にも紹介され、衰退した中心市街地再生や都市再生の手法として注目されてきた。程なくして、日本でも「これまでのようにデベロップメントによる都市づくりだけではなく、マネジメントによる都市づくりの必要性が認識されるようになっていく」現状が提示された。それが、日本に「エリアマネジメント」という言葉を生み出した2005年の小林重敬編著『エリアマネジメント 地区組織による計画と管理運営』である。

エリアマネジメントとは、都市を「つ

くる」時代から、ストックを管理運営し、次世代に向けて新たな価値を生み出す「そだてる」時代に移行する中で生まれた都市環境の運営にかかわる新たな思想である。そこではステークホルダーの間での協働、セクターを超えた連携による内発的な意思と行動が求められるが、そうした高度な動きを支えるのはこれからの都市に期待される「価値」の共有である。

小林重敬先生は、この「価値」に着目しながら自らが率いる森記念財団の研究を通じてエリアマネジメントに関する著書を継続して出版した。2018年の『まちの価値を高めるエリアマネジメント 効果と財源』がそれである。いずれも各地の取り組みの分析を通じて、前者は地域の中の民間主体の絆と官民の連携によって生まれる地域価値の向上とは何かを、とりわけ活動空間に着目しながら整理している。道路、河川、公園、公開空地など、都市の隙間を埋める公共空間がときに賑わいの場として、ときに情報発信ツールとして活用され、それまでなかった地域の魅力を生んでいることがわかる。後者は、そうした活動がどのような指標で評価されるのか、それを共有するプロセスや仕組みを解説するものである。さて、エリアマネジメントの取り組み

みが始まって約半世紀が過ぎた今日、その活動の幅は広がり、安全・安心の確保はもちろん、豊かなアクティビティが生まれる公共空間の創出、地域のストック活用を通じた新たな産業や生活文化の誘引、地域の暮らしの質を高める互助的な活動、そして学びや対話を通じた地域づくり、自然と共生するまちづくり活動など、地域の特性や課題に応じてさまざまな取り組みが展開されるようになった。そして、こうした個別の分野についての書籍も増えている。

公共空間の多様な利用については、各地で道路空間を使ったオープンカフェ、屋台、パークレットなどの取り組みが目立つ。こうした取り組みに必要な、歩行者にひらく空間デザイン、公民連携の組織運営、社会実験～本格実施のプロセス、制度のアップデート、エリアマネジメントの進化など、都市をイノベートする方法論を国内外の多数の事例から解説しているのが、出口敦他編著『ストリートデザインマネジメント』である。また、鈴木未央『マーケットでまちを変える』は公共空間に人が集まる方法としてマーケットの重要性を唱え、その思想や具体的な進め方を解説する。また、日本における最初のエリアマネジメント団体として知られるNPO法人大丸有エリアマネ

保井美樹

やすい・みき——法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科教授。早稲田大学政治経済学部卒業、ニューヨーク大学大学院都市計画修士課程修了。東京大学で博士号取得。工学博士。世界銀行、東京大学特任助教、ニューヨーク大学客員研究員、ロンドン大学客員研究員を経て2012年より現職。全国エリアマネジメントネットワーク副会長。著書に『孤立する都市、つながる街』（共編著、日本経済新聞出版社、2019）、『ポスト2020の都市づくり』（共著、学芸出版社、2017）、『新commons論』（共編著、中央大学出版部、2016）など。



『エリアマネジメント 地区組織による計画と管理運営』
小林重敬編／学芸出版社／2005



『まちの価値を高める エリアマネジメント』
小林重敬・森記念財団編著／学芸出版社／2018



『エリアマネジメント 効果と財源』
小林重敬・森記念財団編著／学芸出版社／2020



『ストリートデザイン マネジメント 公共空間を活用する制度・組織・プロセス』
出口敦他／学芸出版社／2019



『マーケットでまちを変える 人が集まる公共空間のつくりかた』
鈴木未央／学芸出版社／2018



『丸の内仲通り “憧れの街”を支えるストリートの秘密』
NPO法人大丸有エリアマネジメント協会／幻冬社／2019



『エリアリノベーション 変化の構造とローカライズ』
馬場正尊他／学芸出版社／2016

ジメント協会による『丸の内仲通り
“憧れの街”を支えるストリートの秘密』は、1980年代からの継続的な地域ぐるみの取り組みによって仲通りの新たな魅力創出を進め、働くだけの街から多くの人が憧れ、訪れる街へと変化したプロセスが描かれている。

ストック活用に関しては、リノベーションを街の中で連鎖させることによってローカルな魅力を生かした都市再生が可能になることを示した馬場正尊他編著『エリアリノベーション』に始まり、大きな都市ビジョンを描くだけでなく、小さな空間を魅力的に変えることから都市の全体を変化させる可能性を提示する武田重昭他編著『小さな空間から都市をプランニングする』（既出:p4参照）などがある。

暮らしの質向上については、福祉や教育などの分野とまちづくりを接合する考え方や手法を解説する書籍が増えてきた。筆者が編著した『孤立する都市、つながる街』においては、子育て家庭、若者、高齢者などの孤立の現状から、その人たちを地域コミュニティに接合する中間支援の取り組み、そうした取り組みが地域の居住価値を高めていくことを前提に対話や人材育成を進めていく考え方を7人の著者の方々

と整理した。山崎亮氏の『ケアするまちのデザイン 対話で探る超長寿時代のまちづくり』においても、町を構成する人をつなぐことによって自然と助け合いの関係が生まれること、地域の居場所が生まれるだけで介護予防になることなど、対話と交流のデザインが新しい暮らしの価値につながるが示されている。とりわけ住宅を含む地域におけるエリアマネジメントでは、こうした多様な主体の間での対話、緩やかな互助とそれを支える拠点が、今後の鍵となる。

対話だけでなく、地域における学びから始まるまちづくりに着目しているのが、樋口邦史他編著『学びあいの場が育てる地域創生 産学官民の協働実践』である。これはイノベーション拠点としての「遠野みらいづくりカレッジ」の取り組みを通じ、岩手県遠野市における学びあいに始まる地域づくりの取り組みを描くものだ。地域資源の発見とその活用に向けて、学びと対話はセットであることがわかる。筆者も、エリアマネジメントの視点から遠野での取り組みに参加し、本書に論考を届けている。

さらに対話に始まる地域づくりのプロセスやツールを、SDGsに絡めて解

説しているのが、寛裕介『持続可能な地域のつくり方 未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン』（既出:p10参照）である。持続可能な地域づくりを進めるためには、一つのテーマではなく、すべての要素がつながっている包括性を意識すること、一人ひとりの最適と、地域を構成するステークホルダー全員の最適を同時に意識して進めること、そして、未来の理想的な姿をビジョンとして描き、そこからやるべき行動を洗い出していくバックキャスティングの思考法を重視すべきだとして、そのための対話や実践の方法を解説している良書だ。

エリアマネジメントは都市開発とその後の維持管理や運営に着目して生まれた概念であるため、とりわけ空間の利活用に注目が集まる。しかし、都市が持続可能な形で将来に受け継がれていくには、ハードとソフトを超えた包括的な取り組みが必須であり、誰かがサービスを提供して受けるという関係だけではなく、ともに取り組む仕組みづくりが求められる。しかも、withコロナの時代において、住宅というエリアの土地利用区分や都市と地方の分担が大きく変わっていく可能性がある。現在、郊外部の住宅地ではかなりの人がリモートワークを行うようになり、実質的に業務空間が住宅の中にできている。オンラインでの仕事が増え、地方への移住や多地域居住なども増えていこう。そうした時代の変化を捉えながら、多様なステークホルダーが対話を通じて新たな事業創出を行うことができるエリアの力は、今後ますます重要になる。

05 オープンスペース ——自然や余白から都市を再編集する



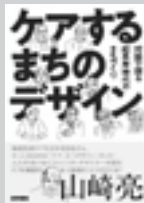
福岡孝則

ふくおか・たかのり——東京農工大学地域環境科学部造園科学科准教授。1974年生まれ。ランドスケープアーキテクト。Fd Landscape主宰。ペンシルバニア大学芸術系大学院ランドスケープ専攻修了後、アメリカやドイツのコンサルタントとして北米や中東、アジアのプロジェクトに携わる。著書に『アナザーユートピア 〈オープンスペース〉から都市を考える』（共著／NTT出版／2019）、『Livable City（住みやすい都市をつくる）』（編著／マルモ出版／2017）、『海外で建築を仕事にする ランドスケープ編』（編著／学芸出版社／2015）など。

04 エリアマネジメント



『孤立する都市、
つながる街』
保井美樹他／
日本経済新聞出版社／2019



『ケアするまちのデザイン
対話で探る超長寿時代の
まちづくり』
山崎亮／医学書院／2019



『学びあいの場が育てる
地域創生
産学官民の協働実践』
樋口邦史他／水曜社／
2018



『再発見される風景』
TNブロープ／1998



『Recovering Landscape』
Princeton Architecture Press
／1999

これからの都市において、オープンスペースこそが人々が住みやすく、健康的な生活をおくるための鍵になる。人々がいま求めているのは、都市の中にない自然や余白で、散歩をしたり、軽い運動をしたり、人と出会ったりするオープンスペースの機能と魅力を高め、生活の質を高めることが都市のサステイナビリティにもつながる。本稿は1990年代にランドスケープを学び、2000年～2012年の間北米と欧州を起点にランドスケープデザインに取り組んできた著者が感じた流れと共に10冊の本を紹介するものである。

『再発見される風景』の中で、ドイツのピーター・ラッツが示した「工業跡地のランドスケープ」や生態システムといった考え方は世界のランドスケープに大きな影響を与えた。欧州最大のルール工業地帯が荒廃していく中で、IBA（国際建築展）の中心プロジェクトでもあったDuisburg Nord Parkを知ったことで、日本で注目され始めていたランドスケープデザインの先の世界を知りたいと米国の大学院でランドスケープを学ぶことを決意し、日本を飛び出した。

『Recovering Landscape』は、時間と場所を再生する、ランドスケープを再構築する、ランドスケープから都市へという3部構成で、当時ペンシ

ルバニア大学ランドスケープ学科長であったJames Cornerによって統括編集されている。欧州と北米の著者たちが論じるランドスケープの再発見論の冒頭の一節、J.B.Jacksonによる「A Landscape is a space deliberately created to speed up or slow down the process of nature」（ランドスケープとは、自然のプロセスを早めたり、遅くしたりするために計画的につくられた空間である）には時間、プロセス、変化など本書に通底する新しい考え方が示されている。

こうしたランドスケープ再生の水脈の源流は、世界的なエコロジカル・デザインのパイオニア、イアン・L・マクハーグによる『デザイン・ウィズ・ネイチャー』（原著は1969年刊行）と現マサチューセッツ工科大学教授のアン・W・スパーン『アーバンエコシステム 自然と共生する都市』（原著は1985年刊行）の2冊から感じ取ることができる。とくにマクハーグの弟子でもあるスパーンは、都市と自然・大気・土・動植物という骨太のテーマの構成でアーバンエコシステムを提案している。2000年をターニングポイントに、屋外空間のデザインやエコロジカルプランニングなど、分裂していたランドスケープが再び注目をされるようになる。ランドスケープの新しい動きが正

に大学の教育現場でも起きており、産業跡地（ブラウンフィールド）の諸課題をどのように解決するか、デザイン演習の対象地は基地跡、衰退した工業跡地や水辺であり、日本で少し学んでいた緑化や狭義のエコロジーではなく、人間の生活や都市の構造まであらゆることを包括するOrganizational Ecologies（組織的エコロジー）が議論されていた。こうした新しいエコロジーの考え方、時間とプロセスを基軸に、その土地に変化を起こすためにランドスケープデザインは何ができるか、というのが自身の中では重要なテーマとなった。

こうした2000年代初頭の議論は、『ランドスケープアーバニズム』（原著は2005年刊行）の中にまとめられている。ランドスケープアーバニズムとは、都市の規範は建物や道路ではなく、ランドスケープにあるという考え方で、再発見されたランドスケープが新しい時代の都市像を示す流れをつくった。北米で2000年代に仕事をする中で、正にそのような大きな流れを感じてきた。たとえば、ニューヨークでは、ブルームバーグ市政時代（2002～2013）にオープンスペースを核にした都市の再生・再編集が展開された。ブルックリン橋の袂に広がる港湾部の未利用地はブルックリンブリッジパークとして

先行整備され、多機能型のオープンスペース群に生まれ変わった。

もっとも、エポックメイキングなプロジェクトはハイラインだろう。撤去が決まっていた高架鉄道線の跡地でアクションを起こしたのは2人の市民である。住民集会で出会ったジョシュア・デイビッドとロバート・ハモンドが1999年に非営利団体のFriends of Highlineを設立し、草の根の動きが、年間600万人以上が訪れる都市の空中公園創設（2009年）の原動力となった。『HIGH LINE アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語』は、ジョシュアとロバートの往復書簡形式でストーリーが展開されており、小さな水の波紋が世界的なランドスケープをつくるまでのストーリーが綴られている。正に現代のアメリカンドリームとも言えるだろう。この中には、前述のJames Corner Field Operationsや当時のニューヨーク市都市計画局長Amanda Burdenまで多くの登場人物が生き生きと描かれていて、改めてランドスケープは都市の生態学と、そこに暮らす市民の生活の相互作用で時間の中でつくられるということが腑に落ちる。

ちょうどハイラインが開園する年に著者はドイツに拠点を移し、ランドスケープアーキテクトとしてアジア・中

東・オーストラリアの都市スケールのランドスケープの骨格をつくる実務に携わるようになる。もともと、ヨーロッパのランドスケープから大きな影響を受けた1990年代後半から2010年までの北米を中心としたランドスケープアーバニズムの動きは、やがてヨーロッパに逆に輸入され再び刺激を与えるようになっていく。

2012年に日本に帰国すると、『海外で建築を仕事にする2 都市・ランドスケープ編』と『Livable City（住みやすい都市をつくる）』を編著として刊行した。前者は世界12カ国15都市で都市・ランドスケープという果てしないフィールドをデザインする仕事につく16名のストーリーを集めたものであり、後者は「オープンスペースから都市を再編集すること」を通して「Livable City（住みやすい都市）」をつくるためのビジョンとアプローチをまとめたものである。

この5年ほどの間に日本でも、屋外公共空間の重要性が強く認識されるようになった。建築家・槇文彦らの編著である『アナザーユートピア 「オープンスペース」から都市を考える』は槇自身がオープンスペースから夢を描くと最後に述べるように、建築家・都市計画家・ランドスケープアーキテクトを始め、多くの領域からの議論と実

践を投げかけている。最後に、縮退時代の都市の骨格をつくりかえるためにグリーンインフラという言葉で本稿を締め括りたい。『実践版！グリーンインフラ』では、自然の力を活かした多機能型の社会基盤のつくり方について領域横断の議論を取りまとめたものである。都市の中で質の高いオープンスペースが整備される事例は増えてきたが、そうした場所の性能（雨水管理、暑熱緩和、生物多様性の向上など）はどうだろうか。環境・社会・経済的な便益を兼ね備えたインフラとしてのオープンスペースのあり方、そしてそれらがネットワーク化されることで防減災や健康など複合的な社会的な課題の解決にもつながる。

オープンスペースのネットワーク化は古くからのテーマであり、都市緑地計画学という枠組みの中で長年研究や実践が積み重ねられてきた。しかしながら、コロナ渦の2020年に「グリーンインフラ」という考え方をヒントに「オープンスペースからの都市の再編集」を実装することは、縮退時代の日本の都市に大きな変化を起こす可能性をもっているのではないだろうか。

05 オープンスペース



『デザイン・ウィズ・ネイチャー』
I・L・マクハーグ／
下河辺淳、川瀬篤美総括監訳
／集文社／1994



『アーバンエコシステム 自然と共生する都市』
A・W・スパーン／
高山啓子訳／
公害対策技術同友会／1995



『ランドスケープアーバニズム』
C・ウォルドハイム／
岡昌史訳／鹿島出版会／
2010



『HIGH LINE アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語』J・デイヴィッド、
R・ハモンド／和田美樹訳／
アメリカンブック&シネマ／2013



『海外で建築を仕事にする2 都市・ランドスケープ編』
福岡孝則編著／
学芸出版社／2015



『Livable City（住みやすい都市をつくる）』
福岡孝則編著／
マルモ出版／2017



『アナザーユートピア 「オープンスペース」から都市を考える』
槇文彦・真壁智治編著／
NTT出版／2019



『実践版！グリーンインフラ』
グリーンインフラ研究会編／
日経BP／2020



surrounding

virtue



*Un bon livre est
le meilleur des*



06 ジェントリフィケーション

——都市開発の光と闇



森千香子

もり・ちかこ——同志社大学社会学部社会学科教授。フランス社会科学高等研究院社会学研究科博士課程修了。博士(社会学)。一橋大学大学院社会学研究科准教授などを経て、2019年より現職。主著に『排除と抵抗の郊外 フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』(東京大学出版会／2016)、『排外主義を問いなおす フランスにおける排除・差別・参加』(共著／勁草書房／2015)、『国境政策のパラドクス』(共編著／勁草書房／2014)、『ヘイト・スピーチの法的研究』(共著／法律文化社／2014)、『レイシズムと外国人嫌悪』(共著／明石書店／2013)など。

ジェントリフィケーションは、1964年に社会学者ルース・グラスが作った言葉である。グラスはロンドンの労働者居住地区で、古い住宅の改修にともなって元からの住民が立ち退き、代わりに中間層の住民が転入する現象に注目し、このような労働者居住地区の居住空間の改善と住民の階層上方移動をジェントリフィケーションと名づけた。

1950～60年代、欧米の多くの都市では郊外化の過程と並行して、都心部の衰退が深刻化した。こうしたなかジェントリフィケーションは、新たな都市再生の手法として注目を集めた。その一方、この現象が引き起こす負の側面——地価上昇にともなう既存の住民の立ち退きや排除——も次第に問題化されるようになった。

今日、ジェントリフィケーションは都市研究で最も活性化する領域の一つだ。その全体像をつかむためにまず読みたいのは、藤塚吉浩の『ジェントリフィケーション』だ。1990年代初頭より一貫してジェントリフィケーション研究を進めてきた著者は、1章でジェントリフィケーション研究が生まれた背景と、これまでの主要理論を明解に示し、2章以降はロンドン、ニューヨーク、東京、京都、大阪、ベルリンなどの事例研究を通して、それぞれの

文脈でジェントリフィケーションがどのように発現し、どのような課題に直面しているのかを明らかにする。

ジェントリフィケーション理論への理解を深めたい人には、ニール・スミス『ジェントリフィケーションと報復都市 新たな都市のフロンティア』が必読だ。スミスは「地代格差論」(3章)、「不均等発展論」(4章)などで知られ、ジェントリフィケーションを都市への投資とその引揚げという資本の運動の観点から捉えた理論家のイメージが強いが、同書ではジェンダーやセクシュアリティ、人種とジェントリフィケーションの関係についても読み応えある議論が展開される(5章)。だが本書の核となるのは2章、10章の「報復都市論」だ。労働者、女性、性的少数者、移民、野宿者などへの攻撃がジェントリフィケーションと並行して発生することの分析は、現代の都市開発の「影」の部分を理解する上で貴重なフレームを与えてくれる。

「報復都市論」の具体例については、ロイック・ヴァカン『貧困という監獄 グローバル化と刑罰国家の到来』の2章の「ゼロ・トレランス」政策に詳しい。1990年代半ばにジュリアーニNY市長のもと、都市住民の「生活の質」を守る名目で、それまで「いたずら」とみなされてきたような些細な行為が

犯罪視されるようになった。その結果、貧困層や特定の人種・民族・ジェンダーの人々が警察に過剰に取り締まれ、都市から排除されていった。

だがグラスの造語から半世紀以上が経ち、ジェントリフィケーションの定義や対象も大きく変化した。都市—郊外、都市—農村の二分法が見直されるなか、農村を舞台とするルーラル・ジェントリフィケーションや観光地を焦点化するツーリズム・ジェントリフィケーションなどの領域も開拓された。

それに加えて、近年のジェントリフィケーションの変化を考える上で重要な二つの要素がある。一つめは金融だ。サスキア・サッセン『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理』の3章は、サブプライムローン破綻に表れたような住宅ローンの金融商品化が、住宅市場や都市開発をいかに変化させたのかを描き出す。このような住宅の金融商品化は現代のジェントリフィケーションにも大きな影響を及ぼしている。

二つめは、ジェントリフィケーション論の脱欧米化である。Loretta Lees, Hyun Bang Shin, and Ernesto Lopez-Morales『Planetary Gentrification』は、これまでの欧米中心の議論を批判し、対象を非西洋圏へと拡大した。韓国、中国、インドなどのアジアや南米の事例が検討さ



『ジェントリフィケーション』
藤塚吉浩／古今書院／2017



『ジェントリフィケーションと報復都市 新たな都市のフロンティア』
N・スミス／ミネルヴァ書房／2014



『貧困という監獄 グローバル化と刑罰国家の到来』
L・ヴァカン／新曜社／2008



『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理』
S・サッセン／明石書店／2017



『Planetary Gentrification』
Loretta Lees, Hyun Bang Shin, and Ernesto Lopez-Morales／Polity／2016



『階級都市 格差が街を侵食する』
橋本健二／ちくま新書／2011

れ、「スラム・ジェントリフィケーション」などの新しい概念を生み出し、ジェントリフィケーション論に新たな地平を切り開いた。

こうしたなか日本でもジェントリフィケーション研究は活性化しており、アート、商業空間、行政主導、観光、村落部、セクシュアリティ、オリンピックなど対象もきわめて多様化しているが、なかでも蓄積が多いのは次の二つの領域だ。

まず「都心回帰」研究がある。2000年代以降、大都市中心部への人口回帰が顕著になったが、それがコミュニティや空間に与える影響の分析が「ジェントリフィケーション」という切り口で進められた。橋本健二『階級都市 格差が街を侵食する』は人口の都心回帰が進むなか、「格差」の拡大が都市空間にも反映されるようになったとして、そのような「階級都市」に光をあてる。そして都心再開発が進み、中心地区の高級化が進むことで、周辺の住宅街の土地が高騰し、居住環境が悪化することになるとして、東京におけるジェントリフィケーションを描き出す。また鰺坂・西村・丸山・徳田編の『さまよえる大都市・大阪 「都市回帰」とコミュニティ』は、2000年代以降、大阪でも人口の都心回帰が急速に進み、都心にアッパーミドルクラス住民

が増加し、以前よりそこにいた貧困層や外国人コミュニティへの「報復都市」的感情が広がったことを「維新ブーム」の背景に読み込む都市研究だ。なかでも9章は大阪市済美地区を対象に、景観変化の生産過程と、住民、ビジネス関係者、利用者の特性を明らかにし、既存のジェントリフィケーション論との重なりとズレを検証する。

次に、寄せ場研究からの分析がある。1980年代以降の寄せ場研究の流れを継承し、1990年代後半より増加した野宿者排除の研究とも接続しながら展開されてきた。代表的なのが原口剛『叫びの都市 寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』だ。原口は釜ヶ崎や大阪市内の公園における野宿者排除の歴史を振り返り、「都市空間から貧民の姿をかき消そうとする(2016:341)」過程としてジェントリフィケーションを捉え、このような歴史の痕跡を消し去るように公共空間が美観化、私営化される過程を批判的に分析した。都市下層への政策に内在する「報復都市」のまなざしが暴かれ、新自由主義や資本主義の批判という大きな枠組みからジェントリフィケーションが論じられる。

一方、日本におけるジェントリフィケーション現象の固有性の検討も進められている。なかでも刺激的な問題提起を行うのが、『日本都市社会学会年

報』(35)に掲載された特集「バブル期の都市問題とジェントリフィケーション論 なぜ『地上げ』は『ジェントリフィケーション』と呼ばれなかったのか」だ。ここでは1980年代後半から1990年代前半にかけてのバブル期に都心で横行した「地上げ」と、同時期に欧米都市圏の分析で用いられていた「ジェントリフィケーション」のずれを複眼的に分析する。

また、日本でも外国人人口が増加し、多文化共生が大きな課題となるなか、五十嵐泰正『上野新論 変わりゆく街、受け継がれる気質』は、移民増加による都市人口の多様化と多文化共生の実践とジェントリフィケーションを含めた都市再開発の問題を「下町・上野」を舞台に架橋する。「脱西洋」という視座からジェントリフィケーション論の刷新が進む現在、「下町」など日本に固有の概念を通して、これまでのジェントリフィケーション論を問い直し、新しい潮流をうむことが期待される。

06 ジェントリフィケーション



『さまよえる大都市・大阪 「都市回帰」とコミュニティ』
鰺坂学・西村雄郎・丸山真央・徳田剛編著／東信堂／2019



『叫びの都市 寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』
原口剛／洛北出版／2016



『バブル期の都市問題とジェントリフィケーション論 なぜ『地上げ』は『ジェントリフィケーション』と呼ばれなかったのか』
下村恭広、五十嵐泰正／『日本都市社会学会年報』2017巻35号



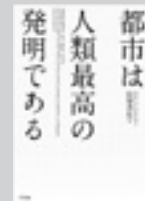
『上野新論 変わりゆく街、受け継がれる気質』
五十嵐泰正／せりか書房／2019

07 ICT・AI ——超高齢社会・ネットワーク・アーカイブス



桂英史

かつら・えいし——1959年長崎県生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科教授。図書館情報大学大学院図書館情報学研究科修士課程図書館情報学専攻修了、富士ゼロックス情報システム株式会社、学術情報センター研究開発部学術研究系助手、東京造形大学助教授を経て、2010年より現職。著書に、『表現のエチカ 芸術の社会的実践を考えるために』（青弓社／2020）、『インタラクティブ・マインド 近代図書館からコンピュータ・ネットワークへ』（NTT出版／2002）他。



『都市は人類最高の発明である』
E・グレイザー／山形浩生訳／NTT出版／2012



『暗黒の啓蒙書』
N・ランド／五井健太郎訳／木澤佐登志解説／講談社／2020

都市とは巨大な資本である。このことは日常生活を続ける上でも、近年ますます意識せざる得なくなってきた。エドワード・グレイザー『都市は人類最高の発明である』はその原題通り、良くも悪くも「《都市の勝利》宣言」である。大都市へ人口が集中し人口密度が上がるほど、コミュニティは多様化し、文化的にも経済的にも相互の刺激が多いのでイノベーションが進むという。都市に集まって住むことそのものに「勝因」があるというわけだ。そういった勝ち馬に乗った感じの言説は21世紀になって目立ってきた。新自由主義のゲームは自由や民主主義を勝ち負けで語ってしまう、ニック・ランド『暗黒の啓蒙書』といった絶望的なままでに乱暴な言説を生んでしまった。自分たちがエリートとして社会を支えているのに、まだ民主主義や格差の解消などといった非効率なことを考えて国の経営をしようなんて馬鹿げている。そんな苛立ちが、白人が強かった時代へのノスタルジアも盛り込まれながら思想として語られる。こういった新自由主義の深層化によって、「デジタルトランスフォーメーション」(ITの進展がよりよき生活をもたらすという考え方)が素朴に受け入れられることもあり、「自己フィードバックで知能として高度化したIT」となったAI

(人工知能)が人間に代わって文明の担い手となるといったシンギュラリティが簡単に走り出してしまう。そうなる、人間の個としての「わたし」はもはや都市の主人公ではいられないかもしれないという主張が登場しても不思議ではない。

AIは昔からパスワードの多い分野であるが、ディープラーニング(深層学習)やマルチモーダル(汎用性)も、テリー・ウィノグラード、フェルナンド・フローレス『コンピュータと認知を理解する』を読み直してみるとさほど新しくないことがわかる。人間とコンピュータの関係論を自律性、つまり自分で自分の道徳の法則をつくって、さらにそれに従うことができるかという能力の問題として取り上げたのがウィノグラードである。自律性というカントの道徳哲学にも通じる哲学的な問題に、ハイデガーの存在論や『オートポイエーシス 生命システムとはなにか』を参照しながら、AI開発の知見と経験に基づいて知能の自律性について取り組んだ希有なエンジニアである。AI開発が取り組んでいるのは既知のことを手がかりにして、考えの筋道をたどり、まだわかっていないことを探求する推理／推論の機構をどのようにコンピュータに処理させるかという問題である。この推理／推論という考え

の道筋に自律性を援用して、AIの課題を「個とは何か」という哲学的なレベルにまで高めたのがウィノグラードにはかならない。

推理／推論という考えの道筋はわれわれ人間にとって実感しやすい知性の一端である。これを文学に応用し推理小説として完成させたのが、エドガー・アラン・ポーである。ポーは「トルコ人(ターク)」というチェス指し人形を推理／推論のモデルとして推理小説を組み立てた。トム・スタンデージ『謎のチェス指し人形「ターク」』を読むと、「トルコ人」という機械のカリスマ化を通じて改めて、個とは何か、他者とは何かという、基本的な問題に向き合うことになる。

エリック・スティーブン・レイモンド『伽藍とバザール オープンソース・ソフトLinuxマニフェスト』は単にプログラマの哲学として読まれるだけではなく、むしろ「贈与」の新しいあり方を示すものとして読み取られるべきであろう。資本主義が爛熟した社会では、評判や評価による贈与の経済が資本の豊かさをもたらすことになる。その一例がオープンソースのフリーソフトである。ここでのフリーは無料であると同時に、表現(プログラミング)の自由を意味している。フリーが新しい経済原理のエンジンとなり、超国民

家と超通貨を事実上もたらしつつある。

ラウル・アリキヴィ、前田陽二『未来型国家エストニアの挑戦 【新版】電子政府がひらく世界』で取り上げられている電子政府の試みは技術的に日々更新され、すでにe-Residencyやビットネーション(Bitnation)といった超国家と超通貨に向けたプロジェクトに派生している。将来的には、国民国家のサービスが受けられなくなっている難民の人たちにも、パスポートの取得、不動産や土地の登記など、国民国家の統制下にある行政サービスを、実際に住んでいる場所に関係なく受けることが技術的には可能となる。このようなプロジェクトがこれまでの国民国家が抱えている統治の矛盾を劇的に変え、政治的な主体がまさに端末市民となって個のあり方と民主主義を大きく変えてゆくことになるかもしれない。

マルクス・ガブリエル『「私」は脳ではない』で展開される新実在論の魅力は相対主義の流れに対して批判的な応答を積み重ねると同時に、世界という全体的な力に依存せず、環境、他者、身体、歴史あるいは文化との相互関係として「〈わたし〉というローカル」を探究することにある。「〈わたし〉というローカル」では、脳という物質の世

界とは異なる自然や社会があるからこそ、さまざまな相互関係としての〈わたし〉が実存として思考される。その実存は〈わたし〉にとって選択肢でもあり、〈わたし〉は〈わたし〉の未来を選択することができる。自由とは、未来の選択肢が保証されていることであり、それは物理的な条件に依存しない。これをAIをめぐる自律性の問題として読むこともできる。

ことばの体系に組み込まれていない欲望の流れを「都市」と呼ぶとすると、端末市民として日常を送り、都市の中で資本化されている〈わたし〉を「贈与されるもの」と言いかえてみることもできる。

ここにあげた本で語られていることは、哲学的には還元主義の否定であり、環境との一体感で語るとすれば、まさに贈与の精神にはかならない。〈わたし〉を「贈与されるもの」と位置づける端末市民の精神は、そのままグレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』やアルネ・ネス『ディープ・エコロジーとは何か エコロジー・共同体・ライフスタイル』で展開されているエコソフィの思考と重なっていく。そして都市という資本にも、エコソフィの思考が不可欠になりつつあることに気づくはずである。

07 ICT・AI



『コンピュータと認知を理解する』
T・ウィノグラード、
F・フローレス／平賀譲訳／
産業図書／1986



『オートポイエーシス 生命システムとはなにか』
H・R・マトウラーナ、
F・J・ヴァレラ／河本英夫訳
／国文社／1991



『謎のチェス指し人形「ターク」』
T・スタンデージ／
服部桂訳／NTT出版／2011



『伽藍とバザール オープンソース・ソフトLinuxマニフェスト』
E・S・レイモンド／
山形浩生訳／光芒社／1999



『未来型国家エストニアの挑戦 【新版】電子政府がひらく世界』
R・アリキヴィ、前田陽二／
オンデマンド(ペーパーバック)
インプレスR&D新版／2017



『「私」は脳ではない』
M・ガブリエル／
姫田多佳子訳／
講談社叢書メチエ／2019



『精神の生態学』
G・ベイトソン／
佐藤良明訳／新思泉社
改訂第二版／1990



『ディープ・エコロジーとは何か エコロジー・共同体・ライフスタイル』
A・ネス／斎藤直輔、開龍美訳／
文化書房博文社(ヴァリエ叢書)
／1997

08 パブリック・ヘルス ——グローバリズムとパンデミック



パブリック・ヘルス（公衆衛生）の中心テーマの一つは、人から人に移る感染症としての伝染病をどう手なずけるかという問題だ。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の日本地図で一目瞭然のとおり、それは大都市における感染症をどう統治するかという問いでもある。

ここでは、都市という視座からパンデミックを眺めるため、生物医学的なウイルスという存在から始めるのではなく、病気の表象に着目することから出発しよう。

感染症は「恐怖」を表象する。目に見えないウイルスによって、これまで健康だった人びとが次々と病気を発症し、ときには命を落とす。その恐怖は健康で病気に罹っていない人びとの感情にも強く訴えかけて、ときには集団的なパニックを引き起こす。そんな感染症の恐怖を純粹状態で捉えているのが、エドガー・アラン・ポーの短編「赤死病の仮面」である。彼は、人びとを襲う感染症を実体の空無な仮面として描くことで、あらゆる場所に遍在する感染症の恐怖を効果的に表現している。なお、「赤死病」はペストの別名である「黒死病」をもじったポーの創作だ。

そうした恐怖は、見知らぬ他者たちが会える近代都市の存在と不可分で、

都市の繁栄の暗い裏面でもある。都市とは、感染症に限らず、さまざまなリスクが遍在する場所なのだ。同じ短編集の「群衆の人」では、孤独な都会人——あてどなく街路を歩き続ける謎めいた老人——の肖像が不気味に描き出されている。その姿は、見知らぬ他者の行き交う雑踏に潜む匿名の感染者のようでもある。

パンデミックの時代に、こうした都市の雑種性は、都市のマジョリティを自認する人びとにとって我慢ならないものとなる。そこで、生み出されるのが、私たちと私たちとは異なる他者を区別するさまざまな分断線やゾーニングだ。その最たるものが、レイシズム（人種差別）による分断——米国のBlack Lives Matter運動を思い出すまでもなく——だろう。

感染症の表象には他者の排除という物語が結びつく。

人種的な他者としての移民が都市に新しい感染症をもたらすという恐怖は、繰り返しパニックを引き起こしてきた。COVID-19がまだ中国の局地的な疫病だった1月には、ヨーロッパ各地でアジア人差別があったことは記憶に新しい。人種差別の不正はわかりやすいが、不潔で感染症のリスクのある人びとへの排除にレイシズムが重ね書きされるとき、差別は「医学的」に

必要な区別と見えてしまいがちだ。

アラン・M・クラウト『沈黙の旅人たち』では、主に米国での感染症と移民と差別の絡まり合う歴史的事例が数多く紹介されている。たとえば、19世紀末での中国人労働者の米国流入とペスト流行が結び付けられ、「黄禍論」やアジア人移民排斥へとつながる経過は、2020年の米中対立を背景に読むと、過ぎ去らない過去として見えてくる。

さて、ここからは、パブリック・ヘルスを考えるために個々の都市をいくつか扱っていくことにしよう。そのとき忘れてはならない都市がロンドンだ。

『ペストの記憶』は、『ロビンソン・クルーソー』で知られるダニエル・デフォーが、1665年のロンドンでのペスト流行を題材にしたドキュメント風小説だ。死者数報を挟みながら、隔離と検疫、風説の横行など、都市の混乱が描かれる。なお、デフォー自身は1660年生まれで、その時期ロンドンにいなかったで、直接にペスト流行を経験したわけではない。研究社版の翻訳は、当時のロンドン地図も収録されている優れたものだ。

19世紀、産業革命後のロンドンには多数の貧困労働者があふれ、チフスなどさまざまな伝染病が猖獗（しょうけつ）をきわめ

美馬達哉

みま たつや——1966年大阪生まれ。立命館大学大学院先端総合学術研究科教授。専門は、医療社会学、脳科学。医学博士。京都大学大学院医学研究科博士課程修了。京都大学医学研究科准教授を経て現職。著書に、『感染症社会 アフターコロナの生政治』（人文書院、2020）、『リスク化される身体 現代医学と統治のテクノロジー』（青土社、2012）他。



「赤死病の仮面」、
「群衆の人」
E・A・ポー／阿部知二訳／
『ポー小説全集』
創元推理文庫／1974



『沈黙の旅人たち』
A・M・クラウト／
中島健訳／青土社／
1997



『ペストの記憶』
D・デフォー／
武田将明訳／
研究社／2017



『イギリスにおける労働者階級の状態—19世紀のロンドンとマンチェスター』上・下／
F・エンゲルス／一條和生他訳／
岩波文庫／1990



『コレラの世界史
（新装版）』
見市雅俊／晶文社／
2020



『感染地図
歴史を変えた未知の病原体』
S・ジョンソン／
矢野真千子訳／
河出文庫／2017



『近代日本と公衆衛生
都市社会史の試み』
小林文広／
雄山閣（新装版）／
2001

ていた。その悲惨を感染症という医学的問題ではなく、資本制による搾取の構造的問題として詳細に分析したのがフリードリッヒ・エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』上・下だ。

19～20世紀に、資本制は植民地を求めてヨーロッパから世界に拡大する。その時期にパンデミックを繰り返したコレラは、帝国主義の時代を象徴する感染症だ。もともとインドの風土病だったコレラは、グローバル化した大英帝国がインドを植民地として開発した結果として世界に広がり、ロンドンなど大都市に甚大な被害を引き起こしたからだ。こうした事情から「開発原病」と呼ばれるコレラを、大英帝国とその首都ロンドンを中心に社会史の手法で多面的に検討したのが、見市雅俊『コレラの世界史』である。

19世紀後半に、ロンドンのコレラは、上下水道整備などの都市衛生改革によって押さえ込まれる。その経緯を歴史読み物にまとめたのが、スティープン・ジョンソン『感染地図』だ。このことから、コレラは「公衆衛生の母」とも呼ばれる。それに対抗してというわけでもないが、『感染地図』の主人公ジョン・スノーは、「疫学の父」との異名のある医師で、当時のロンドンでのコレラ発生地点を地図にまとめる手

法で、コレラ菌に汚染された井戸水が感染症蔓延の原因であることを突き止めている。

だが、感染症の表象という視点からは、感染症汚染地区と衛生的な安全地区をマップ化することは、都市における階層性や差別の問題を露呈させる結果を招き得る。じっさい、コレラのパンデミックが襲った幕末から明治期の日本では、公衆衛生政策が都市の「貧民・賤民」問題と接合され、被差別部落の固定化を生み出していった。その経過を詳細にたどる都市社会史が、京都を扱った小林丈広『近代日本と公衆衛生』と、神戸を扱った安保則男『ミナト神戸 コレラ・ベスト・スラム』である。

とはいえ、もちろん感染症をマップ化すること自体が差別というわけではない。カラフルな美しいマップでグローバルに感染症の歴史を一望できるサンドラ・ヘンペル『ビジュアル・パンデミック・マップ』は、多数の死者を伴うパンデミックなので目に「楽しい」とは言いづらいが、見ていて飽きることはない。マップだけではなく、病者や病原体がどのように「恐怖」として表象されるかも、挿絵の見所の一つだ。

最後に、広い視野から都市とパンデミックとパブリック・ヘルスを問い直す2冊を紹介しておこう。

一つは、哲学者ミシェル・フーコーの都市衛生論や公衆衛生論だ。彼自身が医学や精神医学の歴史を研究していたことはよく知られている。「一八世紀における健康政策」と「社会医学の誕生」(『ミシェル・フーコー思考集成VI』収録)は短いながらも、都市における公衆衛生史の枠を超えて、ヨーロッパ近代に関するフーコーらしい批判的総括となっている。

パンデミックのみならず、人から人に伝染する感染症はそもそも人間が集住しない限り存在し得ない。農業革命や国家の発明を人類の宿病として批判的に再考し、家畜の創出と都市の出現こそがパンデミック誕生の条件でもあったというスリリングな議論を展開することで、古代都市文明の突然の消滅という謎にまで迫る書物がジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史 国家誕生のディープヒストリー』である。

COVID-19のパンデミックが社会の地殻変動の先触れだとすれば、アフターコロナとかウィズコロナの時代、「都市」はどのように変容していくのだろうか。

08 パブリック・ヘルス



『ミナト神戸
コレラ・ベスト・スラム』
安保則男／
学芸出版社／1989



『ビジュアル・パンデミック・マップ
伝染病の起源・拡大・根絶の歴史』
S・ヘンペル／竹田誠他訳／
日経ナショナルジオグラフィック社
／2020



『一八世紀における健康政策』、
『社会医学の誕生』
M・フーコー／小林康夫他訳／
『ミシェル・フーコー思考集成VI』／
筑摩書房／2000



『反穀物の人類史
国家誕生の
ディープヒストリー』
J・C・スコット／立木勝訳
／みすず書房／2019



Let's Greening!

緑のまちづくり

一般財団法人第一生命財団と公益財団法人都市緑化機構が共催する「緑の環境プラン大賞」は、生活の質の向上、コミュニティの醸成などに役立つ、緑豊かな都市環境の形成を目指す緑化プランに対し、助成を行う事業だ。2019年度には「シンボル・ガーデン部門」「ポケット・ガーデン部門」の2部門に対し、国土交通大臣賞2件、緑化大賞2件、コミュニティ大賞9件に加え、特別企画として「おもてなしの庭」大賞1件が選出された。今回は、「シンボル・ガーデン部門」で国土交通大臣賞に選出された緑化プランを訪ね、整備の状況について伺った。

取材・文:佐藤真 photo:坂本政十賜

上野と谷根千を結ぶ「みちひろば」

東京藝術大学上野キャンパス

上野公園エリアと谷中・根津・千駄木エリア(いわゆる谷根千)をつなぐメインストリートが東京藝術大学(以後藝大と略記)キャンパスを貫通している。この道を、誰もが歩いて楽しい空間につくりかえようというのが「みちひろば」だ。

対象地は、20年前に藝大の大学美術館が建設された際に公開空地的に整備された場所。しかし、経年変化で客土が流出し、踏み固められた

状態が長く続いていた。また、キャンパスと公道の境界にはコンクリート壁と鉄柵が設けられていて、往来者には、閉鎖的な印象を与える景観となっていた。

コンクリート壁と鉄柵を撤去し、かわりに植栽を配して、緑の空間に再生するプロジェクトが始まった。その際、鉄柵と同様に景観を損ねていた中低木を伐採し、新たに見通しの良い低木植栽帯を設置した。「藝

大ヘッジ」と名付けられたこの試みは、武蔵野由来の在来種約45種(落葉・常緑、広葉・針葉)を混植し生垣にするものだ。2016年にスタートし新たに植樹された本数は6400本あまりを数える。

きめ細かな植栽計画で四季を楽しむ

「今回は、100mぐらいの区間を整備しました。手前から奥行き方向に



左●ナンキンハゼの並木の足元に設置されたスツールベンチで一休み
中●排水マスの上に置かれた照明内蔵のスツールベンチ。左右に見えるのは土留用の蛇籠
右●横方向に落葉、常緑を交互に植える。奥行き方向は30cm間隔で千鳥に配列

竹を組み、そこに横方向に30種で一組にした苗木を植えて、それを繰り返します。列は多いところで6列、短いところで3列。だいたい30cm間隔で植えてあります。互い違いに、いわゆる千鳥配置にすると、後ろの苗木も見通せるのでいいんですよ」

こう話すのは、このプロジェクトにかかわる東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室で特任助教の君塚和香さんだ。

苗木の植栽は毎回ワークショップ方式で行われ、参加者は藝大の学生、教職員、OB・OGやその家族、他に一般参加もあるという。

「普通はサツキやツツジをしきつめると思いますが、それでは面白くないので混栽にしました。マツやイチ

ョウ、モミジやスギといったものも植えています。もちろん放っておくと大木になりますから、こまめに剪定しています」

藝大の敷地内という利点を活かす

今回のプロジェクトのもう一つの目玉は、スツールベンチの設置だ。既存ナンキンハゼ並木の法面の修景に合わせ、歩道に面してちょっと座れるスツールベンチを点在させたのである。照明を内蔵し、夜にはほのかな光で植栽を照らす。スツールベンチ自体も工夫されていて、2人で並んで座るにはちょうどいいサイズになっているという。公共の場にベンチを設置しようとする、いろいろ

ろ制約があり思うように置けないのだが、ここは藝大の敷地内。「ある程度自由にできました」と語るのは東京藝術大学の理事・副学長の清水泰博さんだ。

「蛇籠を土留に利用したのもよかったと思います。大掛かりな基礎工事が不要になり、蛇籠自体にもツタが巻きつき、立体感のある緑の塊が連続する親しみのある景観ができました」

「みちひろば」が、将来的には歩行者優先の空間へと生まれ変われることを想定しているという。芸術文化の集積地上野公園と、庶民文化の香りの残る谷根千を結ぶ「みちひろば」。それは、藝大を含めた新たな公園キャンパスの誕生を意味するだろう。



左●東京藝術大学正門から東京最古の赤レンガ建築を望む
上●東京藝術大学の理事・副学長の清水泰博さん(左)と東京藝術大学キャンパスグランドデザイン推進室特任助教の君塚和香さん(右)



●大学美術館前の対象地。既存高木のナンキンハゼが並木を形成する

子どもたちの「笑顔」に会いに行く

一般財団法人第一生命財団による「待機児童対策・保育所等助成事業」では、
新設の保育所および認定こども園に対し、
保育の質向上に役立つ遊具、絵本などの拡充を目的とした助成を行っている。
今回は同助成を用い、子どもたちそれぞれの年齢や成長に即し、想像力・創造力を育み、
発展させることができる遊具や教材を充実させた、浜松市の認可保育所を訪ねた。

取材・文: 斎藤夕子 photo: 坂本政十 賜

静岡県浜松市 イーエーエスはんだやま保育園 キラキラ未来! ふくらめ、こどもの想像力!!

国際性を育む

浜松市街地からクルマで20分ほど、
浜松医科大学を始め、大学や病院が
多い閑静なエリアに、2019年4月「イ
ーエーエスはんだやま保育園」が開園
した。「イーエーエス」とは「Escola
Alegria de Saber」というポルトガル
語の頭文字。じつは、同保育園を運営
する学校法人倉橋学園では、かねてよ
りブラジル人学校を運営しており、保
育園も伯人学校の一角に併設されてい
る。その建物は、かつては研究所だっ
たという間口の広い大きな2階建て、
保育園は1階フロアの一部。だが伯人

学校とは玄関口が異なり、0～5歳児
まで、定員60名を預かる園舎として
は十分な広さがあるようだ。建物の前
には100坪ほどの園庭も整備されてい
る。ちなみに、園児には国籍や母語に
規定はなく、現在はほとんどが日本人
だという。さらに補足すると、伯人学
校にも認可外保育所があり、こちらに
はポルトガル語を母語とする子ども
たちが通っている。
「毎週火曜日に、伯人学校とも交流す
る時間を設けているんです。あちらに
は3歳から18歳まで幅広い年齢層の
子どもたちが通っているの、国際的

な交流はもとより、多世代間での交流
もできて、お互いに良い影響を与え合
っていると感じています」

伯人学校と併設されているメリット
を、そう教えてくれるのは青島佐希子
園長だ。また開園にあたっては、伯人
学校で不要になった遊具や備品をわけ
てもらうこともできたそう。ただ「や
はりそれだけでは不十分な面もあり、
今回の助成に応募させていただきまし
た」とのこと。

バラエティに富んだ遊びを展開

イーエーエスはんだやま保育園が、



●ふかふかした「ハイハイランド」の上は、寝転んでも気持ちいい



上●積木ブロックで
ダイナミックに遊ぶ
2歳児のクラス
右●ちょっと急な滑
り台もまた楽しい



上●さすが年長さんだけあって、上手にカブラを積み
み上げていく
右●いずれ訪れる「崩壊」も気にせず、どんどん積み
上げる

今回の助成で導入した遊具類はじつに
バラエティに富んでいる。シンプルな
木製ブロック「KAPRA (カブラ)」を
始め、ウレタンが入った大きな積木や
楽器のセット、紙芝居と絵本のセット、
ままごと用の小さなお家など、園児の
年齢に合わせて必要な遊びを取り入れ
られるようにした。

「先生たちに、今、子どもたちにとっ
てどんな遊びが不足しているのかを考
えてもらい、クラスごとに欲しい遊具
を提案してもらいました。それで、い
ろんなものを細々と希望することにな
ったのですが、子どもたちはみんな、
期待以上の遊び方を開発しています」
と青島園長。いつもは保育計画に則り、
計画的に遊具を出しながら遊んでいる
というが、今日は特別、それぞれのク
ラスでおもちゃ遊びをしているという
ので、さっそく見せてもらった。

0歳児クラスのお気に入り、大き
なソフトブロック「ハイハイランド」。
その名のとおり、ハイハイでくぐり抜



●楽器遊びをする1歳児のクラス。今日はお誕生
日の子の親御さんが参観に来ていた



●ままごとにも最適な小さなお家は、いつも大人気

けられるアーチやスロープなどを組み
合わせることで、いろんなコースをつ
くることができる。乳幼児はたくさん
ハイハイすることで体幹が鍛えられる
ため、結果、立ち上がれるようになった
時にも、転倒が少なくなるそうだ。

賑やかに楽器セットで遊んでいたの
は1歳児のクラス。2歳児のクラスで
は大型の積木ブロックで滑り台をつく
ったり、登ったり、飛び越えたり、ク
ルマに見立てたりと、ダイナミックな
遊びが展開されていた。

3～5歳児が合同で遊んでいる部屋
の中心にあったのは、カブラを積み上
げた塔だ。みんなで積み上げている塔
の中には女の子が入り、彼女もまた、
自分の周りに壁をつくり続けている。
出られなくなるのでは、と心配すると
「もう、何回も壊れているんだよ!」と、
笑いながら教えてくれた。すると程な
く、カラカラと高い音を立てて、塔の
一部が崩れ落ちた。「カブラは崩れた
時もいい音なんですよ」と、青島園長。
そして塔はまた、外からも中からも、
飽くことなく築かれ始めた。

安心して集中できる環境を

「一つの同じおもちゃでも、それぞ
れの年齢によっていろんな遊び方を工夫

しています。2歳のクラスで使ってい
た大型の積木は、普段は窓の外を眺め
る足場になっちゃっていることも多い
んですが(笑)、それでもお友だちと
一緒に工夫しながら使っているので、
社会性が育まれているんだな、と感じ
ます。また、子どもたちにとって自分
の保育園の中にいろんなおもちゃがあ
れば、安心して、じっくり、継続的に
遊ぶことができる。それも子どもたち
の集中力や創造性を育むのに大切なこ
とだと考えています」

さまざまな遊具を導入した意図を、
青島園長はそう説明してくれる。この
日は雨が降ったり止んだりの、少し不
安定な天気だったが、子どもたちは園
舎の中で、お友だちと一緒に、集中し
て遊んでいた。そんな様子に、子ども
たちの柔軟な発想力や、想像力と創造
力が、今まさにメキメキと育っている、
そして、その現場に立ち会っているの
だという思いが湧いてきた。



●青島佐希子園長



今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。(一財)日本地図センター客員研究員、(一財)地図情報センター評議員など。著書に『駅名学入門』(中央公論新社、2020)、『地図帳の深読み』(帝国書院、2019)、『地図で解明!東京の鉄道発達史』(JTBパブリッシング、2016)他多数。

イラストマップ:小夜小町

東京芸術劇場の裏手、ホテルメトロポリタンの足下近くに「池袋史跡公園」という小さなスペースがある。かつてここに「丸池」という小さな池があり(厳密には隣のビル)、^{つるまき}弦巻川の源流であったという。この川は昭和5(1930)年から翌年にかけて大半が暗渠になって久しいのであまり馴染みはないが、山手線をくぐってから雑司ヶ谷鬼子母神の北側を東流し、音羽の谷から南下して江戸川橋で神田川へ注いでいた。その池を確かめるため、最も古い明治42(1909)年測図の1万分の1地形図を確認してみると、なるほど芥子粒のような池に薄青いインクが載っている。しかし公園の場所とは違って、北

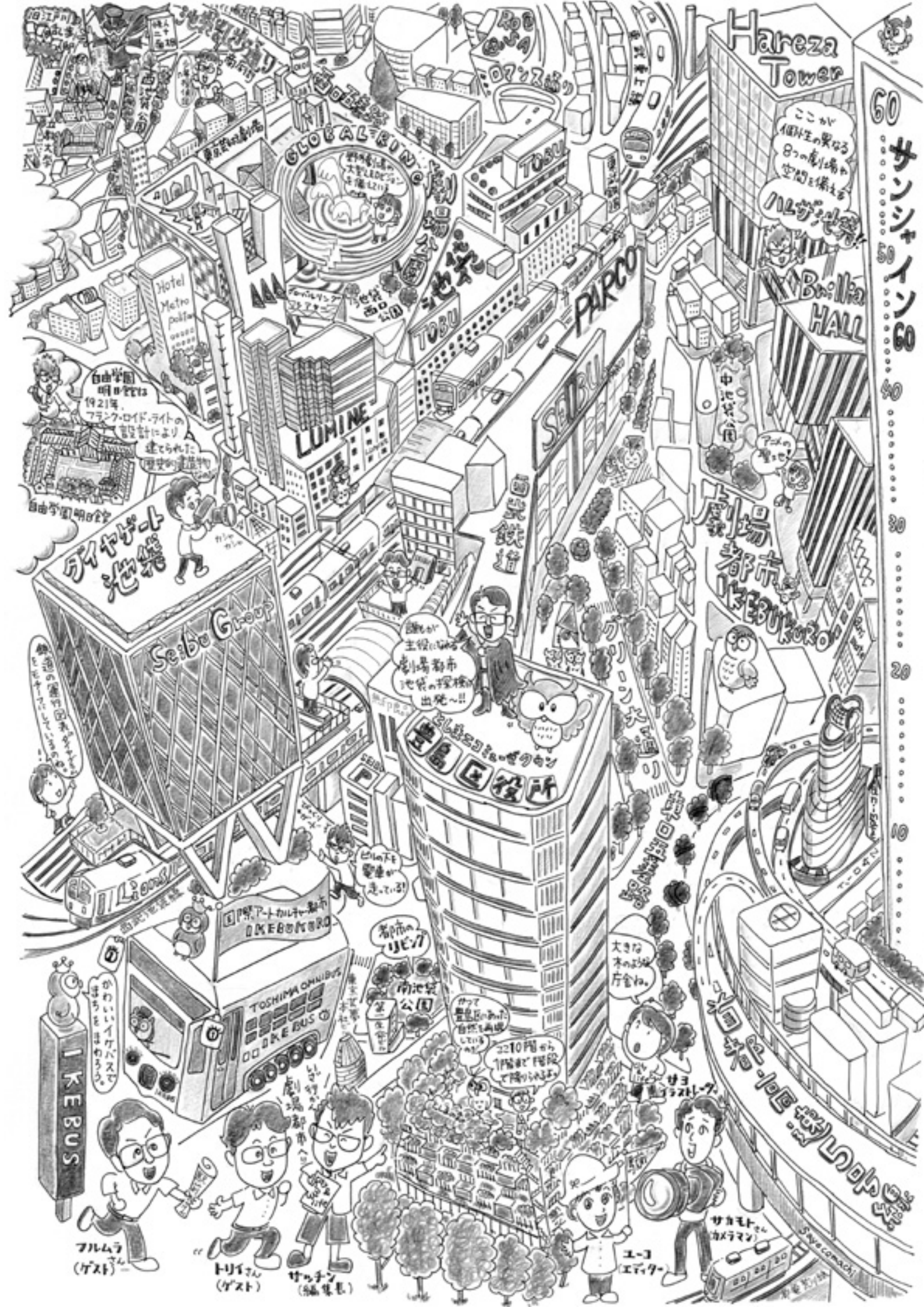
「駅前」探検

第7回池袋駅

池袋駅西口の目と鼻の先、池袋西口公園に昨年11月26日グローバルリングシアターがオープンした。金色に輝く5本のリングが、ステージと客席をぐるりと囲む直径35mの円型の野外劇場。クラシックコンサートやダンス、演劇など多彩なコンテンツを配し、駅前から世界へ文化を発信しようという目論見だ。「グローバルリング」という名前の由来は、かつて西口脇に小さな丸池があったからだという。豊島区は、2015年に「まち全体が舞台」という「国際アート・カルチャー都市構想」を打ち出し、池袋駅周辺地域143haを総合的に整備する計画を発表。池袋駅周辺にある四つの公園を核に都市整備を進めてきた。池袋西口公園もその拠点の一つだ。池袋駅は、東武百貨店、西武百貨店の二つの商業施設と一体となる駅ビルだったことから「駅袋」と揶揄されたりもした。電車から降りた人々は、エキナカで買い物をして、池袋に降り立つことなく電車に乗ってしまう。なんとかして駅の外に出てもらい、街を回遊してほしい。池袋駅周辺地域整備のもう一つの狙いだ。今、池袋の東西主要スポットを真っ赤なバス「IKEBUS」が回遊する。「IKEBUS」が街の名脇役として迎えられる時、「池袋」は、名実ともに劇場都市を冠する街となるはずだ。

西に230mほど離れた西池袋公園だ。「池のあった場所」に池が描かれていないのは、この縮尺でも載らないほど小さいものだったのかもしれない。いずれにせよ、畑の中にカーブを描く等高線からすれば、この場所が谷のどんづまり——谷頭であることは間違いない。それでは池袋の「袋」とは何だろう。一般には川が蛇行して袋状になった場所に付く地名とされているが、具体的にはわからない。弦巻川ではなく池袋の北西側を流れていた谷端川(こちらも今は暗渠)の方が大きく蛇行している。例によって池袋の由来もいろいろあるようだ。『角川日本地名大辞典』では「村の東北方に水田があり、そのあた

りが窪地になっていて、地形が袋のようであったから(新編武蔵風土記稿より)」「おびたしい池があった」というものに混じって、傑作なのは「昔、亀が池より袋を背負って出てきたから」といった珍説まで紹介している。典型的な漢字への付会説だが、昨今ならレジ袋をかぶった外来種のみどりガメがぬっと現われてもおかしくないけれど。池袋は渋谷、新宿と並んで長らく「副都心」と呼ばれてきた。新宿に都庁が移転してからはそちらが「新都心」となったが、いずれも山手線に私鉄が集まるターミナルとして発展した場所である。近世まで遡れば、渋谷は大山街道が通過する古くからの町場があり、



新宿は甲州街道の宿場町で、青梅街道が分岐する交通の要衝であった。

そもそも山手線は新橋から横浜へ向かう官営鉄道の品川駅と、生糸の本場・上州へ向かう日本鉄道（現東北本線）の赤羽駅を結ぶための鉄道として開通している。東京の市街を避けるためにこのルートが選ばれたから、基本的に沿線は田舎であった。それでも駅が設置されたのはその中でも街道沿いの土地で、開通した明治18（1885）年の時点の中間駅は目黒、渋谷、新宿、目白、板橋でいずれも街道との交点である。

ここに池袋がないのは主要な街道が通過しておらず、どこにでもある（といたら失礼だが）純農村だったから。山手線は村を通過するのみで、前述の明治の地形図を見ても、現在では繁華街になっているあたりのは大半は畑が続いている。明治5（1872）年の池袋村は205戸1161人、産物は「沢庵漬600樽」などと記されていた（東京府志料）。

駅ができたのは線路が通じて18年も経った明治36（1903）年で、しかも田端へ向かう支線（豊島線）の分岐点としての設置だった（前年に信号所を設置）。当初の予定では目白駅で分岐するはずだったが、地形的な要素に加えて巨大な巣鴨監獄を北へ避けるために分岐を北へずらし、そのために設置されたという。目白駅が切り通しの中にあって拡張が困難という理由もあったようだ。

池袋駅の所在地は北豊島郡巣鴨村大字池袋字蟹ヶ窪。音羽川の源流近くの窪地に付いた地名である。蟹はおそらく当て字で、カニは侵食された地形に

付くことが多い。ここも細流が小さな崖を成していたかもしれないが、あるいはサワガニ由来もあり得るだろうか。もちろん命名した本人に聞かなければわからない。

池袋が本格的に発展し始めたのは東武東上線の前身である東上鉄道が大正3（1914）年、翌4年に西武池袋線の前身・武蔵野鉄道が相次いで開通してからである。東上鉄道は東京と上州を結ぶ計画から両者の頭文字をつないだもので、結局は現在の終点・寄居止まりとなって「上」には達していないが、川越方面と直結し便利にした。武蔵野鉄道は所沢を経て飯能までを一気に開通させている。

両線の乗客は池袋駅から山手線の電車に乗り換えて都心方面を目指した。山手線に電車が走り始めたのは明治42（1909）年12月で、当時まだ上野～烏森（現新橋）間が開通していないので、烏森～品川～新宿～池袋～田端～上野間のC字形の系統と、池袋～赤羽間の区間運転である。ちなみに環状運転が始まるのは大正14（1925）年であった。

これらの鉄道が開通した影響は大きく、『帝国鉄道年鑑』（昭和3年）によれば国鉄池袋駅の年間乗車人数（下車を含まず）は明治45～大正元（1912）年度の29.9万人から両線開通後の大正5（1916）年度には65.2万人と倍増以上となっている。ちなみにその後の第一次世界大戦頃から日本の近代化は著しく、通勤通学者が激増した結果、武蔵野鉄道開通の10年後である大正14（1925）年には735.5万人と10倍以上だ。ついでながら令和元（2019）年度

のJR池袋駅の乗車人数は1日で55.9万人だから、大正4年の1年分の乗客数を1日で計上してしまう（年間2億390万人）。まさに「別の国」になったわけである。東上鉄道はその後東武鉄道の東上線となり、武蔵野鉄道は西武鉄道池袋線となった。池袋駅の西口が東武、東口が西武となったのはたまたまで、地方出身者に対して意地悪をしているわけではない。

立教学院が築地の居留地から移転すべく明治42（1909）年に買ったのは、この畑ばかりだった巣鴨村大字池袋字中原の広大な土地であった。当時の地価は1坪1円30銭ほどと格安だったという（『豊島区史地図編 下』昭和49年）。両私鉄の開通前ではあるが、東上鉄道は会社も設立されて動き始めており、学院はこの土地の将来性をちゃんと見越していたようだ。立教大学としての第一期移転は大正8（1919）年5月のことである。地盤も良かったようで、建ったばかりの有名な赤煉瓦の校舎は、関東大震災に見舞われても少々破損で済んだのは幸いであった。

この地にひと足先に進出したのが豊島師範学校である。東京府立の教員養成機関で、東京学芸大学のルーツのひとつであるが、立教が土地を買った明治42（1909）年に開校した。隣の目白駅前に進出した学習院も前年の移転で、ちょっとした「郊外移転ブーム」と形容できそう。明治42（1909）年の地形図によれば池袋駅の西側には人家が1軒もなく畑のみが広がっており、電車の窓からも校舎の全貌が見渡せただろう。学校の唱歌の響きも風に乗って聞こえてきただろう。



池袋西口公園野外劇場グローバルリングシアター photo:坂本政十賜

今号に関連する特集号をPick Up
(その他は特集タイトルのみ)

No.1	特集「都市の幹線道路」	(1984.2)	在庫切れ
No.2	特集「都市公園」	(1984.5)	在庫切れ
No.3	特集「都市と河川」	(1984.12)	
No.4	特集「子どものための都市計画」	(1985.6)	在庫切れ
No.5	特集「都市と盛り場」	(1985.12)	
No.6	特集「都市生活と神社仏閣」	(1986.5)	
No.7	特集「住宅地の道路と家並み」	(1986.9)	
No.8	特集「都市とヒューマンスケール」	(1987.3)	
No.9	特集「都市と水辺」	(1987.7)	在庫切れ
No.10	特集「都市の景観」	(1987.12)	在庫切れ
No.11	特集「都市と防火」	(1988.7)	在庫切れ
No.12	特集「都市とアメニティ」	(1988.12)	在庫切れ
No.13	特集「都市と運河」	(1989.8)	
No.14	特集「都市再開発とアーバンデザイン」	(1989.12)	
No.15	特集「アミューズメントと都市」	(1990.3)	
No.16	特集「高齢化社会と都市」	(1990.6)	在庫切れ
No.17	特集「私鉄と歩んだ都市」	(1990.9)	
No.18	特集「都市とホール」	(1990.12)	
No.19	特集「エコロジー都市」	(1991.3)	
No.20	特集「新・集合住宅論」	(1991.6)	
No.21	特集「新・リゾート論」	(1991.9)	
No.22	特集「都市と商業空間」	(1991.12)	
No.23	特集「都市の民俗誌」	(1992.3)	
			
	●「都」から「都市」への変貌―都市と文化人類学 米山俊直 ●座談会 都市文化の再生―祭りと都市のコミュニティ 松平誠十 神崎宣武＋橋爪紳也 ●ルボ 企業民俗学から見た地方都市と進出企業 ●ルボ 都市が祭りを変える 木部与巴仁 ●住民主体のまちづくり―地縁社会を守るために 林泰義 ●住緑アソシエーション―町内会の歴史と展望 岩崎信彦 ●連載 都市を拓いた人々・6 青森 吉田豊		
No.24	特集「都市と緑化」	(1992.6)	
No.25	特集「公共建築のデザイン」	(1992.9)	
No.26	特集「都市と高層ビル」	(1992.12)	
No.27	特集「住宅の間取り」	(1993.3)	
No.28	特集「都市と広告」	(1993.6)	
No.29	特集「都市の上水道」	(1993.9)	
No.30	特集「都市の保存」	(1993.12)	
No.31	特集「ミュージアムと都市」	(1994.3)	
No.32	特集「プレハブ住宅」	(1994.6)	
No.33	特集「都市の色彩」	(1994.9)	
No.34	特集「観光都市の条件」	(1994.12)	
No.35	特集「都市と下水道」	(1995.3)	
No.36	特集「マンションのメンテナンス」	(1995.6)	
No.37	特集「都市と歩道空間」	(1995.9)	
No.38	特集「ゴミとリサイクル」	(1995.12)	
No.39	特集「住宅の水まわり」	(1996.3)	

No.40	特集「都市の駐車空間」	(1996.6)
No.41	特集「橋のデザイン」	(1996.9)
No.42	特集「建築と木材」	(1996.12)
No.43	特集「輸入住宅」	(1997.3)
No.44	特集「都市と学校」	(1997.6)
No.45	特集「環境共生型まちづくり」	(1997.9)
No.46	特集「都市と情報化」	(1997.12)
No.47	特集「老いない住宅」	(1998.3)
No.48	特集「都市と駅舎」	(1998.6)
No.49	特集「住宅のコスト」	(1998.9)
No.50	特集「路面電車ルネサンス」	(1998.12)
No.51	特集「ヒトが集まる、まちがにぎわう―集客都市へ」	(1999.3)
No.52	特集「シルバー・ハウジング」	(1999.6)
No.53	特集「NPOとまちづくり」	(1999.9)
No.54	特集「地域のノード、公共施設の新潮流」	(1999.12)
No.55	特集「都市公園の未来」	(2000.3)
No.56	特集「まちづくりの新しいパラダイム」	(2000.6)



- 対談 | 21世紀「まちづくり」の条件 | 日端康雄＋林泰義
- 対談 | ソフトインフラをつくる―多様性としてのまちづくり | 延藤安弘＋折戸雄司
- クロニクル・アーカイブス | 都市開発・まちづくりの50年―戦後「都市」はどう変わったか
- 対談 | バーチャルシティのデザイン―伽藍型まちづくりからバザール型まちづくりへ | 山形浩生＋五十嵐太郎
- 連載 | 高齢化社会のまちづくり・5
- 連載 | 都市を拓いた人々・34 四日市

No.57	特集「島のまちづくりに学ぶ 沖縄編」	(2000.9)
No.58	特集「地域に開く大学」	(2000.12)
No.59	特集「危機管理のまちづくり」	(2001.3)
No.60	特集「保存―都市と建築、過去と未来をつなぐもの」	(2001.6)
No.61	特集「30代建築家の都市イメージ」	(2001.9)
No.62	特集「使う建築、使うまち―都市のストック活用法 国内編」	(2001.12)
No.63	特集「LETSのまちづくり」	(2002.3)
No.64	特集「『都心居住』のまちづくり」	(2002.6)
No.65	特集「都市はアートで刺激される」	(2002.9)
No.66	特集「ランドスケープ・デザインの新展開―地形を活かしたまちづくり」	(2002.12)
No.67	特集「スローライフとまちづくり」	(2003.3)
No.68	特集「サステナブルな都市“成長”政策―都市計画と長期ビジョン」	(2003.6)
No.69	特集「吉祥寺―住みたい町ナンバー1の理由」	(2003.9)
No.70	特集「緑の建物づくり」	(2003.12)
No.71	特集「都市と観光、新たな視点」	(2004.3)
No.72	特集「構造改革特区とまちづくり」	(2004.6)
No.73	特集「マルチプル／モビリティ コンパクトシティの条件」	(2004.9)

- No.74 特集「都市の言説を巡る旅
10のキーワードから探る都市【論】の現在」 (2004.12)
- ブック・ナビゲーション | 都市の未来と都市論のゆくえ／都市再生論とは何か | 日端康雄／NPOとまちづくり | 林泰義／江戸・東京からみる「都市論」の展開 | 陣内秀信／都市に集まる、都市に暮らす | 小谷部育子



- ブック・アーカイブス | 都市を読む10の視点 | 01地域再生／分権型社会 | 池上岳彦／02シュリンキング・シティ／スマートグロース | 小泉秀樹／03コンパクトシティ／サステナビリティ | 海道清信／04ポストモータリゼーション／マルチモーダル | 土井勉／05セキュリティ／ゲイテッドコミュニティ | 平山洋介／06「水辺、緑、里山」都市のストック【自然系】 | 山内彩子／07「リノベーション／コンバージョン」都市のストック【構造物系】 | 五十嵐太郎／08ランドスケープデザイン | 宮城俊作／09都市が語る歴史／風景が語る都市 | 福井憲彦／10都市のカルチュラル・スタディーズ | 若林幹夫
- コラム | 1-「まちづくり」の基本／2-都市を読むための古典／3-情報化は都市を変容させたか／4-スローライフ／5-都市が励起していたあの時代／6-都市民俗学と都市伝説／7-ファッションになった住まい／8-地図・写真でみる東京の今昔

No.75	特集「マルチモーダルが都市を楽しむする【ヨーロッパ編】」	(2005.3)
No.76	特集「路地・横丁空間からの都市再生」	(2005.6)
No.77	特集「公共空間、新たな視点」	(2005.9)
No.78	特集「小さな町の豊かな暮らし」	(2005.12)
No.79	特集「都市の「良質な」居住環境」	(2006.3)
No.80	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❶」	(2006.6)
No.81	特集「「安全・安心のまちづくり」を考える」	(2006.9)
No.82	特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の「素顔のまま」でまちづくり」	(2006.12)
No.83	特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」	(2007.3) 重版
No.84	特集「サイクリング・シティの可能性」	(2007.6)
No.85	特集「地図とまち―見る・歩く・つくる」	(2007.9)
No.86	特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ―❷」	(2007.12)

No.87	特集「「美味し国」の景観論―フランス、都市景観の新たな創造」	(2008.3)
No.88	特集「美味しいまちづくり」	(2008.6)
No.89	特集「都市を愉しむいくつかの方法」	(2008.9)
No.90	特集「シュリンキング・シティ―縮小する都市の新たなイメージ」	(2008.12)
No.91	特集「都市彩譜―まちのいろどりのふ」	(2009.3)
No.92	特集「fun town―たのしい・かわいい・やさしいまちづくり」	(2009.6)

- インタビュー | まちづくりのキーワードは「かわいい」 | 三浦展
- ルボ | たのしい・かわいい・やさしいまち | 1.戦国武将人気で、交流人口が増加―人気ゲームがきっかけで町が活性化／2.「ナチュラルかわいい」が「住みたい町」のポイントに―自由が丘、吉祥寺、下北沢に共通するもの／3.アニメやイラストで、町の魅力をPR―「埋もれた資源」に光を当てる新たな手法として
- たのしい・かわいい・やさしい―まちづくりのための15の法則 | 01建築家には、フェミニンな感性も大切である。／02海外で顕著に表出してこそ、日本のオリジナリティに気づく。／03女性鉄道ファンの増加は、新たな観光資源の発見につながる。／04魅力ある町とは、「キャラクター」がある（「キャラ立ち」した）町である。／05何よりも私をかわいくしてくれる町がいい町だと思っている。／06小さくすると、町も建物も親しみがわいてくる。／07「かわいい」が付加されると、新たな嗜好のジャンルが生まれる。／08「かわいい」と「美しい」では、「クオリティ」の次元が異なる。／09移動屋台は、都市を演出する現代のキャラバンである。／10住宅イルミネーションは町に愛着をもつきっかけである。／11ライトアップの手法によって、都市は「専大」にも「かわいく」もなり得る。／12田舎を「かわいい」と捉えることで、愛着と誇りが育まれるのである。／13「かわいい」の根底には、日本の伝統的美意識が息づいている。／14ファッションと景観は、呼応するものである。／15現代のゾーニングには、「用途」「機能」に加えて「虚構性」が必要である。
- インタビュー | 「カワイイ」という感覚が、建築を、都市を元気にする | 真壁智治

No.93	特集「マチとムラの幸福のレシピ」	(2009.9)
No.94	特集「創造のまちづくり」	(2009.12)
No.95	特集「団地ルネサンス」	(2010.3)
No.96	特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」	(2010.6)
No.97	特集「新しい公共交通～生活支援ネットワークへ～」	(2010.9)
No.98	特集「下北沢から「都市」を考える」	(2010.12) 在庫切れ
No.99	特集「「学校」からのまちづくり」	(2011.3)
No.100	特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」	(2011.6)
		
	●ポスト工業化社会と都市のイメージ 日端康雄 ●超情報化社会の到来、都市はどう変わっていくのか 日端康雄×熊坂賢次×赤松正行 ●ソーシャルネットワークは都市を開くのか、閉じるのか 鈴木謙介×南後由和×濱野智史 ●スローネットから考える、ひと・まち・くらし 西垣通 ●city&life archives (No.1-99)	

No.101	特集「震災後の地域・コミュニティ・住まい―再生・復興への視点」	(2011.9)
No.102	特集「交流住宅―新しい暮らしのかたち」	(2011.12)
No.103	特集「時間に暮らす」	(2012.3)
No.104	特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」	(2012.6)
No.105	特集「「町おこし」新潮流―地域に埋もれたコンテンツを発信する」	(2012.9)
No.106	特集「子どもの空間とまちづくり」	(2012.12) 在庫切れ
No.107	特集「シティホール―市庁舎の新潮流」	(2013.3)
No.108	特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」	(2013.7)
No.109	特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」	(2013.11)
No.110	特集「都市とサイン」	(2014.3)
No.111	特集「自由が丘―暮らしやすさの秘密を探る」	(2014.7)
No.112	特集「新しいパートナーシップ―PPP>PFI> コンセッション方式」	(2014.11)
No.113	特集「新しい図書館」	(2015.3)
No.114	特集「空き家―家と暮らしと地域のこれから」	(2015.7)
No.115	特集「酒とまちづくり」	(2015.11)

- No.116 特集「ロスト近代と都市の未来」 (2016.3)
- 対談・1 | 生態的都市―可能性としてのテリトリーオ | 進士五十ハ×陣内秀信
 - 対談・2 | 過疎を逆手に―あえて都市に野生を放つ | 林直樹×姥浦道生
 - 対談・3 | 都市の潜在能力―ロスト近代・ヘテロトピア・自然の多産性 | 内田隆三×橋本努
 - グラビア | parallelismo | 鈴木知之
 - スキマファイル・7 | 水都大阪、スキマクルージング 水の回廊を巡る
 - 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・7 | 代沢みこころ保育園／ABCみかけ保育園

No.117	特集「建築とまちづくり」	(2016.7)
No.118	特集「空き地カルチャー 多孔質都市の可能性」	(2016.11)
No.119	特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」	(2017.3)
No.120	特集「ライフスタイルとしての「防災」」	(2017.8)
No.121	特集「夕方からのまちづくり」	(2017.12)
No.122	特集「これからの住まい・くらし―やわらかい都市へ」	(2018.4)
No.123	特集「みんなでつくり、みんなでつかう」	(2018.8)
No.124	特集「生まれ変わる街―渋谷・新宿・池袋」	(2018.12)
No.125	特集「オープンスペースからのまちづくり」	(2019.4)
No.126	特集「都市と木材」	(2019.8)
No.127	特集「カフェとまちづくり―心地よい空間と街並み」	(2019.12)

- No.128 特集「クラウドファンディングで町を楽しく魅力的に」 (2020.4)
- 連続インタビュー | クラウドファンディングの可能性 | クラウドファンディングとは何か | 井上徹／まちづくりと株式投資型クラウドファンディング | 佐藤公信／活かせネットの拡散力―地域経済とクラウドファンディング | 木下斉
 - ケーススタディ | 町と人をつなぐクラウドファンディング | 岐阜ホール／#カミハチキテル-URBAN TRANSIT BAY-／TUGBOAT_TAI SHO (タグボート大正)
 - クラウドファンディングから始まるまちづくり―自治体による活用の可能性
 - 連載 | Let' s Greening! 緑のまちづくり・6 | まちとまちを結ぶみどりと音楽にあふれた道「みどりの鎌倉街道」
 - 連載 | 子どもたちの「笑顔」に会いに行く・19 | あけぼのほりえこども園
 - 連載 | 噂の「駅前」探検・6 | 浅草駅 | 今尾恵介・小夜小町・坂本政十腸

財団が発行した調査研究報告書	
当財団では助成した研究について、その成果である調査研究報告書を発行しています。 ここ1年間に発行したものをご紹介します。	
京都東九条の在日コリアン密集居住地の形成と住宅整備事業による都市環境の変容	田路貴浩（京都大学大学院工学研究科・准教授）
復興期間の終了後における原発避難市町村の長期復興政策に関する研究	川崎興太（福島大学共生システム理工学類・准教授）
都心回帰に伴う住宅ストックの変動による市街地再編の実態と効果に関する研究 —大阪市西区、阿倍野区を対象として—	蕭閔偉（大阪市立大学工学部都市学科・准教授）
我が国の都市計画における歴史・文化の尊重と位置づけに関する研究 —地方再生コンパクトシティモデル事業の事例分析—	藤岡麻理子（横浜市立大学グローバル都市協力研究センター・特任助教）
立地適正化計画における地方都市郊外住宅市街地の「選別」に関する調査・研究	野澤康（工学院大学建築学部・教授）他
瀬戸内海における地域構造に関する歴史的考察	樋渡彩（近畿大学工学部・講師）
独居高齢者の生活行動と「孤独感」に関する研究	山村崇（早稲田大学高等研究所・講師）他
水辺空間をめぐる観光と住民生活の共存可能な政策論の構築	野田岳仁（法政大学現代福祉学部・准教授）
（刊行順。肩書は当時のもの。敬称略）	

調査研究報告書をご希望の方には一部2,000円でお頒けしますので、当財団までご連絡願います。
過去の調査研究報告書についてはホームページ（次頁にアドレス）にテーマ、研究者名および要旨等を掲載しています。

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社（現第一生命保険株式会社）からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所（認定こども園を含む）に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「緑の環境プラン大賞」に取り組んでいます。

●ホームページ <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

購読のご案内
年3回（4月・8月・12月）発行、頒価500円＋送料実費
定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容（PDF）をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください、ご希望の号をお求め願います。

city [®] life no.129 Aug.- Nov. 2020	
2020年8月発行	
企画委員	日端康雄（慶應義塾大学名誉教授） 陣内秀信（法政大学特任教授） 大村謙二郎（筑波大学名誉教授） 小泉秀樹（東京大学教授） 木下庸子（工学院大学教授・設計組織ADH代表） 小野文夫（第一生命財団常務理事） 佐藤 真（株式会社アルシーヴ社）
編集・発行	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社アルシーヴ社 斎藤夕子
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社エイチケイグラフィックス 頒価500円＋送料実費

